

「柳生の芸能Ⅱ」 外伝勢法

はじめに

平成十九年に「春風館文庫1」として刊行した神戸金七編『柳生の芸能』は、新陰流の祖・上泉伊勢守、柳生新陰流を創始した柳生宗厳から尾張柳生三代・柳生連也に至る初期柳生新陰流の達人たちが創始した「本伝」と呼ばれる勢法である。

神戸金七が編纂した元々の『柳生の芸能』には、続編として江戸時代後期の長岡桃嶺が考案した「外伝勢法」が載せられている。「外伝勢法」は新陰流中興に力をそそいだ桃嶺が、当時盛行していた、防具を着けて自由に打ち合う試合稽古に対抗して、これを学ばば充分であると試合型として考案した勢法である。「柳生の芸能Ⅱ」の内容は、この「外伝勢法」である。

その内もつとも基本となる「相雷刀 八勢法」は『柳生新陰流を学ぶ』（赤羽根龍夫著・スキージャーナル）に演武写真付で詳細に解説した。また同書のDVD版も「監修・加藤伊三男、赤羽根龍夫」で刊行された。DVD版には「中段十四勢法」も映像が載せられている。書籍版もDVD版も、「打太刀 下村幸裕 使太刀 赤羽根大介」である。本書ではこの「中段十四勢法」（十一本にまとめてある）は詳細な演武写真を載せておいた。

赤羽根 大介 ※
赤羽根 龍夫 ※※

※神奈川歯科大学助教(体育学)
※神奈川歯科大学教授(哲学)

「外伝勢法」には勢法以外に、「中庸五箇の身」、「流水の位」、「風帆の位」、「打三足」など柳生新陰流を学ぶ者がぜひ知っておかなければならない考え方が詳しく説明されていて有益である。

それ以外に「外伝勢法」の特色は、宮本武蔵の「円明流」について各所に触れられていることである。

吉岡一門との三度にわたる決闘に勝利した武蔵は「円明流天下一」を名乗るようになる。それ以後、武蔵は晩年に熊本に行く頃までは「円明流」を名乗っていた。その間、武蔵は尾張に三年滞在し、その後は弟子の竹村与右衛門を遣わしたことによって武蔵の円明流は尾張藩を中心に広まった。同藩では元禄時代頃までは柳生新陰流と円明流のみが行なわれていた。そのため柳生新陰流は円明流を強く意識し、それに勝つ勢法も研究していたようである。柳生新陰流道場でも円明流が稽古されていたことは、新陰流研究の第一人者である杉田定一の「名古屋柳生流では二刀流もとり入れていた」（『いろは柳生物語』）という証言でも明らかである。「外伝勢法」には「二刀勢法」と「対二刀勢法」が載せられ、柳生新陰流の術理を説明するのに随所に円明流が引用されているが、それだけでなく『刀法録』自体に武蔵の「兵法三十五箇条」が「円明三十五ヶ條の内」として載せられ、

若干の解説も加えられている。

一般には尾張の円明流は昭和以降は途絶えたと考えられている。しかし春風館では尾張貫流槍術の師範家に伝えられた円明流が現在でも高弟の間で稽古されている。その遣い方は柳生流で遣われたものと同じである。本書ではこのうち「外伝勢法」中の「二刀勢法」にあたる七本の演武写真を掲載した。

円明流については九月までに『宮本武蔵「円明流」を学ぶ』DVD版 宮本武蔵「円明流」を学ぶ（共にスキージャーナル）を刊行予定である。

『柳生の芸能』の主な原典は長岡桃嶺の『刀法録』である。『刀法録』は「本原第一」「教習第二」「勢法第三」「勢法第四」「勢法第五」「試合第六」「形勢第七」「虚実第八」「応変第九」「抜刀第十」「稽古第十一」「総論第十二」「奥義第十三」「雑事」に分かれている。大冊であり、また必ずしも十分に整理されているとは云えないが、神戸は主に「勢法編」と「意思編」を元に分かりやすくまとめており、江戸時代における柳生新陰流の勢法を知るには絶好の書である。

『刀法録』は漢文と和文で書かれている。『柳生の芸能』では、漢文は神戸金七により分かり易くするための若干の意訳を伴った和文訳がなされている。本書では和文および和文訳のみを掲載することにした。打太刀・使太刀を分けたこと、「一」内は校訂者によること、旧かな遣いは出来るだけ改めたこと、漢字も可能なかぎり普通に使われているものに改めたことなど、前書『柳生の芸能』と同様である。

「刀金録」の「金」は「法」の当て字なので「刀法録」とし、「刈る」は意味上「切る」とした。その他、圪↓境 都て↓すべて 竭きる↓尽きる 避す、廻す、外す↓外す 遏める、止める↓止める 竊む↓盗む 摧く、碎く↓碎く 卑い↓低い、など読み易いように工夫を加えた。

春風館文庫Ⅱ「新陰流（足田伝）の研究」の訂正箇所

一三頁 上段三行目 文化二十一年 ↓文化七年

一四頁 上段二三行目 享保二十一年（二八三五）↓文化七年（二八一〇）



「二刀勢法」を演武する神戸金七（87歳）と加藤館長

試合勢法 第一

本伝大転〔柳生連也が初心者のために考案した勢法〕……7

下段

中段

雷刀

増補

雷刀、虚を撃つ 順 敵下段

同 逆

愚按勢法〔長岡桃嶺が考案した型〕

一、相雷刀〔八勢法〕……………7

一 相雷刀 順・逆二ツ打〔合し打〕

二 疾雷刀 順 先撃

三 疾雷刀 逆

四 蟬翼刀 後れ打 逆 相架け止める

五 蟬翼刀 後れ打 順 相架け流す

六 江河勢 連け撃

七 水車勢 合し打

八 水車勢 先

二、中段〔十四勢法・十一本にまとめて遣う〕……………14

一 中段 外し打 直勢 敵・雷刀 〔二本目〕

二 城郭勢 順 首を捍ぐ 却き打 〔二本目〕

三 城郭勢 腹を捍ぐ 流す

四 城郭勢 拳を捍ぐ 止める

三勢 続け使い

五 城郭勢 逆 軋身 〔三本目〕

六 城郭勢 順 著け打

二勢 続け使い

七 城郭勢 順 足を捍ぐ 〔四本目〕

八 城郭勢 逆 手足を外す 〔五本目〕

九 城郭勢 順 著け撥い 〔六本目〕

十 城郭勢 逆 受け取り 〔七本目〕

十一 城郭勢 順 手を反し止める 〔八本目〕

十二 城郭勢 逆 手を反し止める 〔九本目〕

十三 城郭勢 順 裏を捍ぎ撥う 〔十本目〕

十四 城郭勢 逆 裏を捍ぎ撥う 〔十一本目〕

三、下段〔八勢法〕……………19

一 相架け 順

二 相架け 逆

三 入り身 順

四 入り身 逆

五 足を捍ぎ止める 順

六 足を捍ぎ止める 逆

七 足を捍ぎ流す 逆

八 足を捍ぎ流す 順

四、相雷刀〔十三勢法〕

一 相架け 逆

二 相架け 順

三 止め打 順

四 止め打 逆

五 流し止めを兼ねる 順逆同勢

六 打落し

七 打落し後、弾ねるを止める

八 外し打

九 外して後、弾ねるを止める

十 外して後、打落し

十一 座おしき打

十二 下を打つを止める

十三 下を打つを止める 逆

..... 21

六、雷刀〔八勢法〕

一 下段を砕く 逆

二 下段を砕く 順

三 城郭を砕く 逆

四 城郭を砕く 順

五 雷の相架けを砕く 順

六 雷の相架けを砕く 逆

七 雷の止め打を砕く 順

八 雷の止め打を砕く 逆

..... 26

七、相雷刀〔三勢法〕

一 左変

二 右変

三 足を坐おしき打つ

..... 28

五、雷刀〔七勢法〕

一 城郭を攻める 順

二 城郭を攻める 逆

三 足を打つ

四 下段の相架けを打つ 順

五 下段の相架けを打つ 逆

六 下段の入身を打つ 順

七 下段の入身を打つ 逆

..... 24

八、相雷刀合し抑え〔三勢法〕

一 合し抑え 順 捻り

二 合し抑え 逆 捻り

三 引下り

..... 29

総計六十四勢法なり

試合勢法 第二

十七天の花車

一、相雷刀〔七勢法〕……………57

一 中段に形して迎える 直勢架け打 順・逆

二 青岸に形して迎える 順外し打

三 青岸に形して迎える 逆外し打

四 中・下の間に形して迎える 順相架け退り打

五 中・下に間に形して迎える 逆轉身

六 躁がしく来たるを打つ 順

七 躁がしく来たるを打つ 逆

二、相城郭〔三勢法〕……………58

八 順

九 逆 嶺谷、敵・順

十 順 嶺谷、敵・逆

三、相下段〔五勢法〕……………59

十一 先打

十二 後れ打

十三 合し打

十四 左転 刀背を執つて推す 逆

十五 右転 刀背を執つて推す 順

四、撥草〔二勢法〕……………60

十六 先合

五、十太刀変〔三勢法〕……………60

十八 首

十九 捍ぎ入るを打つ

六、猿廻変〔二勢法〕……………60

二〇 先

二一 後打勢

七、一刀変〔二勢法〕……………60

二二 弾ねて後返り、また打落す

二三 是極

八、相雷刀〔三勢法〕……………62

二四 刀棒に変す

二五 折甲に変す

二六 俯し打つ

九、雷刀〔五勢法〕……………62

二七 撥草を打つ 順

二八 撥草を打つ 逆

二九 十太刀を打つ

三〇 車を打つ 逆止める

三一 車を打つ 順流す

右三十一勢法、天狗抄許しの後、伝える

小太刀勢法

一、小転下段変

一下段変

二後れ入る

三鋒を弾ね入る

四腹を押し入る 順流す

五腹を押し入る 逆架け止める

六足を外す 順・逆同勢

七足を押し 架け流す

64

二、小転雷刀変

一架け撥う

二手を押し 架け止める

三吭を押し 架け流す

四腹を外し打つ 順

五腹を外し打つ 逆

六転し打落し

右下段七勢、雷刀六勢・小転を伝えた後これを授く

六十一勢の次なり

65

三、小転下段変雷刀

一下段変雷刀 敵雷刀 下同じ

二逆打止める 二逆勢〔二が二箇所ある〕

66

三雷刀轉身

四足を外す

五足を外す 逆

六止め流す 無数

七止々勢

八、九中段を打つ

十轉身 先打勢

十一車に向かう

十二弾ねるを外す

右、相伝の者のみ伝うべし

〔二刀勢法〕

両刀雷刀

一両刀雷刀

二同円曲

三同下段の円曲

右三勢法、奪刀法を伝えて後許すなり

69

〔対二刀勢法〕

我れ一刀、敵両刀

一火砲勢

二城郭偷眼勢

三雷刀先打

四増補天第五勢

五同 天第四勢

右五勢、伝書の後これを授ける

70

試合勢法 第一

本伝大転

この勢法は使太刀・打太刀、長短同じからざる韜〔袋竹刀〕を用いるといえども、その実は長短に関せざるゆえに、ともに両手二尺五寸の韜を執つてこの理を復習すべし。ここに挙げるところは変勢の却き打なり。

下段 変勢却き打

中段 変勢却き打

雷刀 変勢却き打

三勢とも遠く打ちを敵に求めず、近く我が任脈を打つ。目著は二星また明鏡のごとく敵の惣身を照らし、刃の物打に節を持ち、撃石火の機なり。

二尺五寸の太刀 柄七寸・刃長一尺八寸

打太刀片手にて斜めに打つ。使太刀我が任脈を却り打

二星 敵の目のこと

物打 太刀先三寸のこと

節 拍子をもつこと

撃石火 直ちに打つこと、刹那の間髪もなき打ちのこと

我が任脈 我が人中〔身体の中心線〕のこと、真中のこと

増補

雷刀、虚を撃つ 順敵下段

同 逆

本伝は十文字の勝ちを立てるといへども、しかも雷の落ちるや定まる処なきゆえに、心、住著〔居着く〕することなく、時により宜しきを制すること練らしむ。また初学、堅に打つは易く横に打つは難し。よつて横打を練らしむるなり。

愚按〔長岡桃嶺〕勢法

ここに挙げるころの語は截合書・没滋味書〔ともに柳生宗厳〕・不捨書〔柳生利厳〕・枝葉書・宗矩の口伝書・武蔵流の三十五條〔宮本武蔵〕兵法三十五箇条〕等の要語なり。間々、房成〔桃嶺〕が愚意を以て補う。皆、勝ちを制するの法なり。見やすくせんがため多く原語を用いる。

順・逆は、刀を執つて立ちし時、鋒、我が右にあるを順といい、左にあるを逆という。打ちは右より左に打つを順、左より右に打つを逆という。打合いは、敵刀を我が左に避け開くを順合しといい、右に避け開くを逆合しという。

一、相雷刀〔八勢法〕

一 相雷刀 順・逆二つ打

使太刀・打太刀とも境外において右足を前にして雷刀に立つ。

双方、相がかりに右足より進む。

打太刀 刃境にいたり首を打つ。〔右足〕

使太刀 順に合して雷刀に上げ、左足を前にす。

打太刀 また打つ。〔左足〕

使太刀 逆に合して雷刀に上げ、右足を前にす。

これ元は転し間截の一種にして昔の試合なり。

意思〔長岡桃嶺による考察〕

今この勝つ形を挙げて一勢法となすなり。

順・逆二つ打、合し乗る打ちなり。一調子なり。後の打ちは逆勢を略して続け使うものなり。この勢法を以て中庸五箇の身を習わす。一に曰く。直立身、四方正面。二に曰く。高大の勢、盛大の気。三に曰く。足を躋下〔へその下〕より使い脚掌を以て踏む。四に曰く。打つ時、人中〔身体の中心線〕を失わず。五に曰く。打つて後、初めのごとく直立つ。これ始めなく終りなし。循環端無き意、流水の流れる所、これ源の意なり。

中庸五箇の身 偏ならず、倚らず、過不及なきを中という。

庸は常なり、易らざるなり。

第一 直立たる身 四方正面

連翁〔柳生連也〕の中身また四方面、また面向不背、

また後は腹の面

第二 高に高を懸かる事

高き構えに弥高くの意。中段より上はかさをとる意

第三 足を躋の下より使い、踏む事

第四 位を放つて打込む時、筋を外さざる事

第五 打込みてなお始めのごとく直立つ事

三重五重の意 つきぬ意

流水その処、水上 始終無しと

瑞公の御工夫、余はみな不捨書〔柳生利蔽〕の意なり。当今の教えの急務なり。〔瑞公は尾張二代藩主光友先師のこと〕

流水の位 付り、その処、水上の心持

流水、その処水上、これは流れる水の源とありて千万里に流るゆえに、その処を源とし始めとし、尽きぬ処を使う意なり。打たれる時は揚げおる処が始めなり。また揚げたる時は打ちたる処が始めなり。何処にてもその処が始めとなることなり。その処に残心あり。別に残心と云う事なし。

二 疾雷刀 順先撃

三 同 逆

使太刀・打太刀とも前の通り雷刀に立つ。

使太刀 間境にて上体を残し、左足を盗み右足を踏み込み、打太刀の左手を順に先撃ちする。

逆は、

使太刀 右足を盗み左足を大いに踏み込み、右手を逆に先打ちする。

意思

これいわゆる疾雷、耳を掩うに及ばず、迅雷、目を瞑るに及ばずの意なり。相雷刀先撃とあり。これを疾雷刀と名づける。一批斫、腕より首に至る。一打三足、無尽の打ち、絶法の打ち、没滋味〔起こりが見えない〕の打ち、この三つを練るものなり。高きに向かつて脚下を忘れることなかれ。枝葉書に云う、雷刀にして敵を見下し進むとも、必ず眼、東南にありて、意は西北にあり。一思一志に著く〔居付く〕ことなかれ。手の下がるは悪しく、また水月の内に入りては先々の位よし。また敵の萌す心を勝つ。またよく水月を越すを以て善しとなす。また蔽〔柳生利蔽〕曰く、その位悪しといえども先、その位善しといえども、敵に使われるを悪しとなす。その位悪しといえども速やかに勝つを善とす。

風帆の位 付り、弓腰の位
 掣電の位 付り、不尋の位

瑞公〔徳川光友〕の御工夫なり。これは帆に風を受けて少しもたるみ緩む
 処なくスラスラと浪を蹴立てて進む処なり。弓腰とは腰に力を取ることな
 り。掣電とはひくいなづまのことにて、風帆の位より一打三足、先に切り
 付ける勢い、目をつむるひまもなき打ちなり。不尋の位とは、敵をうかが
 って出でざるることなり。



『刀法録』「雑事」以下同じ

四 蝉翼刀 後れ打 逆相架け止める

使太刀 打太刀とも雷刀に立ちて相がかりに懸かること前に同じ。

使太刀 間境にて左足を前にし、上体を前に懸かる。

打太刀 浅く頭に打つ。

使太刀 上体をそらして外し、打太刀の頭を打つ。

打太刀 受けて使太刀の頭を打つ。

使太刀 逆に相架け止め、打太刀の左腕に勝つ。

打太刀 また打つ。

使太刀 順に架け止めて左腕に勝つ。

打太刀 左足に来たる。

使太刀 受け止めて打太刀の左腕に勝つ。

打太刀 また右足を打つ。

使太刀 受け止めて右腕に勝つ。

打太刀 また頭に来たる。

使太刀 二本相架け止め。



五 蝉翼刀 後れ打 順相架け流す

前に同じ。右足を前にし、順に二本相懸け流し、足二本相架け流し、後二本、頭に來たるを相架け流し。

意思

これいわゆる相離れること蝉翼〔蝉の羽、薄いことのとえ〕のごとき意なり。敵の鋒と我が身と相去ること蝉翼を隔てるがごとしと云う。少し頭身を却き避けて乗るものなり。孤雁出群の勢なり。越す拍子なり。越して勝つ習いなり。待つ心、懸にあり、進み挑みて動くを待つ。

また遠々の位、また真位上詰、万法と号すの意、また宗矩の書に云う、水月はよく越さざるを以てよく越すとす。越さざる所、これ先々の迎えなり。越さざる所の位なり。この意また味わうべし。また五七條〔宮本武蔵『兵法三十五箇条』〕に云う、敵の動きの跡〔以下「後」とする〕を打つ、これ二の越しと云うものなり。また剣を踏む意、これ左足を以て敵の打ちの止まる所を踏む意、また打つと示して太刀は後より打つ意、また身は進む身にして足と心とを残り、ぬけず・はらず、敵の心を動かす。これ皆味わうべし。心や萌すときは則ちその機已に露われる。

相懸け、順・逆〔「相懸け」とは、敵が打ってくる太刀を受けるのではなく、こちらから積極的に当たっていくことをいう〕

逆は相懸け止めを習い、順は流しを習うなり。敵、拳を羨う時は、相架け止めは速やかに拳を下げて捍ぎ、肘を羨う時、相架け流しは疾く鋒を下げて巻くなり。相架けはすべて当たる拍子にして、受けるのみなれば、碎かれることあり。

刀を使う時は通身より使い、拳を以て刀を使うことなけれ。太刀は身と離れることなけれ。また身、刀中に入るがよし。相架け止め、敵、足を

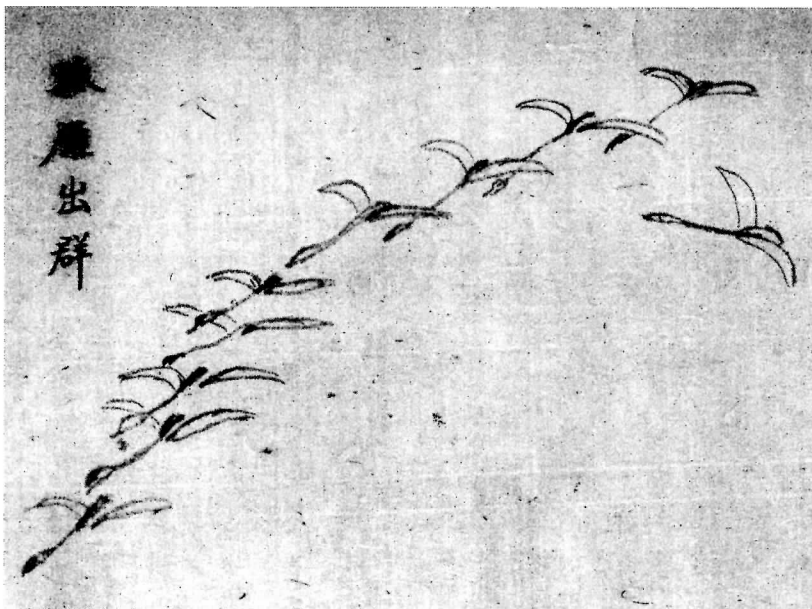
打つ時、打止める意なり。或いは外して越し勝つ。止めんと欲する時は手を打たれるを戒しむ。ゆえに敵の拳を打止める意あり。相架け流しは触れかかる意なり。

真の位上詰 これは没滋味書の語なり。

瑞公の引き玉う所なり。遠々の位、越す拍子

後は下の水車なり。相架けは当たる拍子

また身、刀中に入る。



六 江河勢 連け撃

これいわゆる尽きざること江河のごとき〔孫子〕意なり。

使太刀・打太刀 境外にて雷刀に立ち、進むこと前の如し。

打太刀 刃境にて頭を打つ。

使太刀 順に合し乗る。

打太刀 足を払う。

使太刀 右足を引き外し同時に首を打ち、雷刀に揚げる。

意思

相雷刀重ね撃、これを江河勢と名付く。三重五重は打って弾ねるのみの教えにあらず。打連ねて幾つも重ね打つの意あり。この意は相合して勝ちを得ざるとき打つものなり。すべて合し打は手を打たれざる用心、肝要なり。手を打たれざる方法は近く打つことなり。延びて遠く打つときは中る。しかれども歌に云う。

嶺谷を勝たんとはかり思いなば

過不及あるぞ時にしたがえ

初学はよく乗ること善し。打たれて勝つ意なり。すべて身を離れる構え

（雷刀・撥草・順逆の車）は一調子に勝つなり。

この後の打ち（足を打つものは）、避けて越し勝つものなり。

浮足の位 付り、腰の位 三重・五重

浮き足は瑞公の御工夫。三重・五重もまた引きたまう処なり。

浮足とは、打ちたる時は五ケの身にて前の膝に身を持たせ居れども、前足へ来たる時は必ず外す意あるゆえ、浮足の意なり。この心なければ足に来たるとき外しがたきなり。ゆえに腰に拍子を持つこと。三重・五重はいく

つも続けて打って尽きぬ意なり。一調子は合し打を云うなり。

七 水車勢 合し打

使太刀・打太刀 境外に立ち、進むこと前の如し。

打太刀 頭を打つ。

使太刀 合し打つ。

打太刀 身を引き使太刀の首を打つ。

使太刀 順に相架け止め、打太刀の腕を打つ。

打太刀 また打つ。

使太刀 逆に相架け、腕を打つ。

打太刀 拳を打つ。

使太刀 拳を捍ぎて打太刀の腕を打つ。順・逆二本

打太刀 また頭を打つ。

使太刀 相架け止め腕を打つ。順・逆二本

八 水車勢先 子刀あり、右を捍ぎ左を捍ぐ。

我（使太刀） 先に敵の左腕を打つ。

敵（打太刀） 少し頭身を却け、これをさけんとして後、我が首を打つ。

我 疾く拳を以て鋒をはね上げ相架け打つ。

敵 また打つ。

我 また相架け流す。

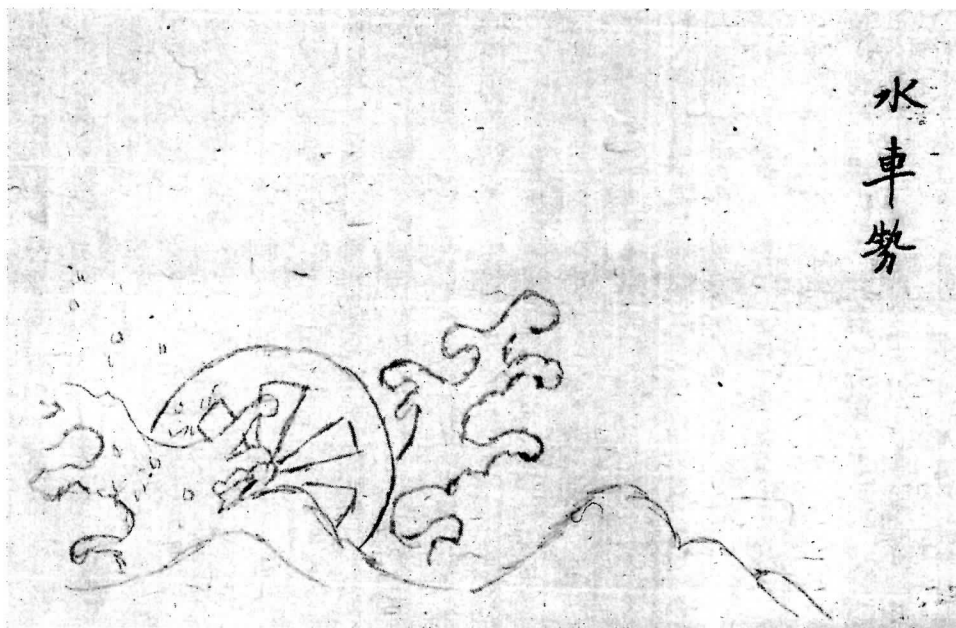
敵 また打つ。

我 相架け流す。

敵 拳を打つ。

我 刀を引き拳を防ぐ。

水車勢



敵裏を払う。
我上へ抜き越して敵の拳を打ち、雷刀に取り揚げる。

意志

これ、撃捍げきかん、〔撃つたり捍ふせいだり〕巻舒かんじゆ〔巻いたり伸ばしたり〕循環端はし無く、水車の、水に随つて転ずるが如きによつて名付く。

打つて打たれ、打たれて勝つは外なり。内に入るは、打つて勝ち、打たれて勝つ位。これ後の、水車の、波に随つて転ずるがごとし。よつて名付く。一の著眼は嶺谷に勝つことなり。万法皈一、これ衆妙の門、敵に打ちかぶせて勝ち、また上を残し下を盗む、左足なり。

また敵に近づくべく敵を近づけるべからず。これ相架け、或いは転じて腹足を打つ。また敵の腹足を打つに應じてこれをとどめ、これを流しこれを外はずす法は、後撃の逆勢は足を打つを打下ろしてとどむ。同じく順勢は足を打つを架け流す。また重ね撃勢は足を打つを外す。またこの合し打勢は拳を打つをとどめ打つ。またこの先打勢は拳を打つを外し、打つ先は初め相架け、拳を以て鋒を挙げて弾ね懸かるなり。これ当たる拍子なり。また右肩を打つものには鋒とぎを垂れ、架け流し勝つなり。

立合の位 付つり、氣ウツス位

これもまた、公の御工夫なり。始め我が虚靈不昧〔無心〕の鏡に敵の争う氣をうつし、敵の鏡に我が処女をうつすなり。かくの如く虚靈ならざれば、水車の車に随つて転ずるが如くはならざるなり。水車は無心にして自ずからよく転ず。また歌に、

自ずから澄めるものからうつるとは

月も思わず水ものほらず

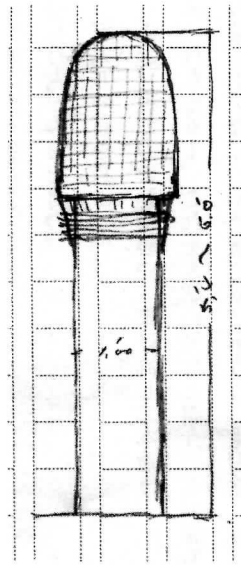
同意なり。また打たれて勝つは外なり。合して打って勝つは内なり。先はこれ懸り口、三箇の意なり。

註 これは虚霊不昧の位なり。ゆえに立合の始め、我が心の鏡に敵の氣を移し、我が処女の如き氣形を敵にうつすことなり。また迎えは、我が打つと云う氣をうつすことなり。

「処女」は孫子の字、体ゆるやかなれば、やわらかによわよわと見えることなり。

「懸り口三箇の大事」は截合書に詳し。

右八勢法は試合勢法のもとをなすものにて、この基本勢法はその意をよく熟読玩味し、朝夕表木を打って独り稽古をする外、或いは相手あらば互いに交代して十分錬磨することが肝心である。



表木



神奈川歯科大学古武道講座

二、中段〔十四勢法を十一勢法に続けて遣う〕

〔中段一本目〕

一中段 手を外す直勢、敵雷刀

打太刀 雷刀

使太刀 中段直勢に構え、相がかりに進む。

打太刀 間境にて拳に打ち来たる。

使太刀 上に外し打太刀の首を打つ。

打太刀 受けて使太刀の首を打つ。

使太刀 相架け流し、打太刀の腕に勝つ。架け流し二本遣う。

手を挙げて敵の打ちを外す。これを大詰の外しと謂う。この勝ちなり。

抜け越し勝ち越す拍子なり。始め腕を餌に飼う意、太刀連なり。連れ拍

子の放れて連れる習いなり。

腕を香餌に飼いて仕懸け、大詰の外し懸けに好き事これありと云う意なり。

大詰の外しとは手上げて外し打つを云う。

〔中段二本目〕

二城郭勢 順首を捍ぐ

三 同 腹を捍ぐ 流す

四 同 拳を捍ぐ 止める

三勢続け使い

打太刀 雷刀

使太刀 中段、城郭にて相がかりに進む。

打太刀 間境にて使太刀の拳を打つ。

使太刀 身を却きて拳を打止め、また城郭に構え迎える。

打太刀 首を打つ。

使太刀 順に当たり逆に架け流す。

打太刀 また首を打つ。

使太刀 逆に当たり順に相架け流す。

打太刀 腹を打つ。

使太刀 順に当たり逆に架け流す。

打太刀 また腹を打つ。

使太刀 逆に当たり順に架け流す。

打太刀 また拳を打つ。

使太刀 順に打止めて、逆に打太刀が雷刀に上げる腕を打つ。

打太刀 また使太刀の拳を打つ。

使太刀 また逆に打止めて、順に打太刀の腕に勝つ。

註 打太刀は雷刀より打つのみにて、ただ太刀を上げ下げすればよし。

足どりは相互交代に使い、順のときは右足前、逆のときは左足前に

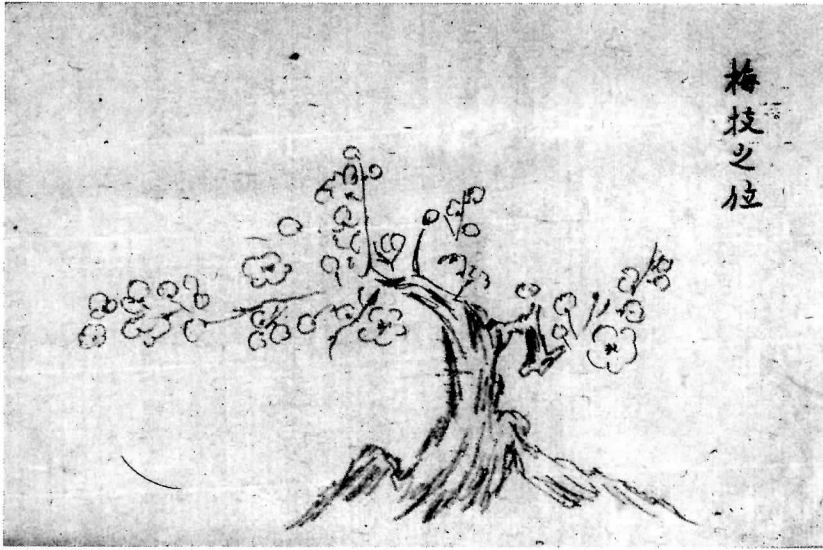
するを基本とす。もつとも錬磨向上の人は別なり。

意思

この三勢続け使う。青岸の勝を開く勢、間隙無きこと城郭に入るが如し。よつて名付く。

古来相伝の身形五箇の意なり。

中段城郭、これによつて昔の五箇の身を習うものなり。身を太刀の中に蔵すの教えなり。間隙なきものなり。その道を塞ぐ風体なり。上は近く下は遠くす。鋒を敵の肩に当てる。



瑞公御工夫 梅樹の位

これは梅の枝が横へ茂り出て、近づかんとすれば、目を突きさそうな意なり。味わうべし。

また遠山、左の首の根、肩の中なり。城郭構え太刀先の付け処なり。また進退不定の足ということあり。

これ関を越されず敵を牽き出すものなり。越さざる所、先々の迎えなり。この意またその道を塞ぐ風体に通ず。

この勢法、約して云えば、初めは架け止め、却き打、次は架け流し、終りは引き止めなり。

〔中段三本目〕

五城郭勢 逆轉身

六 同 順著け打

二勢、続け使い

同節、打って待つ。或いは進退をなす。

打太刀 雷刀

使太刀 逆城郭、相がかりに進む。

打太刀 首へ深く打ち来たる。

使太刀 逆に当たり順に角かけて足を立て替わり、架け流し、打太刀の左腕に勝つ。

打太刀 また首へ打ち来たる。

使太刀 打太刀の右に転じて順に当たり、逆に胴に架け打つ。

打太刀 また打ち来たる。

使太刀 逆に当たり、順に打太刀の左腕に架け流し勝つ。

打太刀 また打つ。

使太刀 そのまま順に著け打つこと二本。三本目に打太刀の右腕に太刀を廻して打つ。

打太刀 また首へ打ち来たる。

使太刀 逆に当たり逆に打太刀の右腕に付け打つ。

意思

これ身を変える習いなり。昔の、近きには遠きの教え、思つべし。

附け打ちとは、受けて刀を反さず手に附く太刀連なり。

初めは流し、後は止めるなり。

逆城郭は強く刀を打たれるときは落し易く戒むべし。拇指・食指、用意して強く握り、敵の太刀に当たる意あり。

近きに遠きとは、調子にのり隔かけてのき打つの意なり。

水上の胡蘆子〔ひょうたん〕、捺著すれば即ち転す

これは水に浮き居るふくべを押せばヒヨツと脇へのき、押せばヒヨツとのごとく転化することなり。

〔中段四本目〕

七城郭勢 順足を捍ぐ

打太刀 雷刀

使太刀 順城郭にして相がかりに進む。

打太刀 間境より拳を打つ。

使太刀 順に受け止める。

打太刀 裏を打つ。

使太刀 すくい上げることく鋒を下げて受け止める。

打太刀 順に足を打つ。
使太刀 鋒を下げて順に受け止め、打太刀の右腕に順に廻刀して逆に打つ。



〔中段五本目〕

八城郭勢 逆手足を外す

打太刀 雷刀

使太刀 逆城郭にして相がかりに進む。

打太刀 間境にて使太刀の拳を打つ。

使太刀 足を立て替え左足を半歩引いて右足を大いに踏み込み、打太刀の

首を真直ぐに打つ。

打太刀 逆に当たり、順に使太刀の横面を打つ。

使太刀 順に当たり受け、逆に打太刀の右腕を打つ。

打太刀 逆に使太刀の足を打つ。

使太刀 逆に受け止めて、順に打太刀の左腕に勝つ。

意思

これ高きを見て低きを忘れずとなり。また止めるは難し。よつて止めるを練るものなり。また足を押ぐ時、手を高く近くして両手を用心してよく見分け、止めるなり。また速くには近くの意、後の打ちにあり。

逆勢は、これ低きより高きに昇り、高きより低きに下がる。順勢と勢を互いにす。高曲の心、低く仕かけて越して高く勝つ。

〔中段六本目〕

九城郭勢 順著け撥い

打太刀 雷刀

使太刀 順城郭、相がかりに懸かる。

打太刀 間境にて首を打つ。

使太刀 付けのる拍子にのり、刃の背にて手前に落し、打太刀の左腕を順

に引き切りて却く。

打太刀 首に来たる。

使太刀 順に当たり逆に打太刀の右腕に勝つ。

〔中段七本目〕

十城郭勢 逆受け取り

打太刀 雷刀

使太刀 逆城郭にして相がかりに進む。

打太刀 間境より首を深く打つ。

使太刀 当たる拍子を以て打太刀の双手を抱き上げることく入り身する。

意思

順逆、勢を互いにす。近々の教え、太刀間三尺の教えまた思うべし。著け拂いは付ける拍子なり。受け取る時は則ち無刀の心なり。また大調子に向かうときは小調子、また拳を取つて拳を取る事を見る事なかれ。速やかに撞く善し。また離れ際の打ちは押ぎ打なり。これはこれ離れて勝負なり。先を緩むることなかれ。またこの著け撥い勝ちは城郭勢の本意なり。

〔中段八本目〕

十一城郭勢 順手を反し止める

打太刀 雷刀

使太刀 順城郭に立ち、双方より進みよる。

打太刀 刃境より使太刀の裏を逆に打つ。

使太刀 手を反して逆に止め、順に打太刀の左腕を打つ。

打太刀 首に打ち来たる。
使太刀 順に当て、逆に打太刀の右腕を打つ。

〔中段九本目〕

十二城郭勢 逆手を反し止める

打太刀 雷刀

使太刀 逆城郭にて立ち、双方より進みよる。

打太刀 使太刀の裏を打つ。

使太刀 手を反して止め、逆に打太刀の右腕を打つ。

打太刀 首に打ち来たる。

使太刀 逆に当たり順に打太刀の左腕に勝つ。

意思

手を反し裏を止めるものは順ならずといえども、時ありて用いるゆえに、備えて變動自在を求めしむ。また昔の教えに、遠山逆打の意あり。遠山逆打は敵、触刃境外より打つゆえに合して勝つ、これはれに似たり。後の打ちは低きより高きに昇る。疾く当たる拍子なり。

遠山、逆打の意 これ右の肩先へ打ち来たらば極意と勝つべしの意なり。

〔中段十本目〕

十三城郭勢 順裏を捍ぎ撥う

打太刀 雷刀

使太刀 順城郭、双方より進みよる。

打太刀 触刃境より裏を強く打つて迫る。

使太刀 鋒を下げて拳を上げて順に受けとめ、速やかに右拳を以て打太刀の拳を拂い落し、逆に左隻手刀となりて打太刀の足を払う。

〔中段十一本目〕

十四城郭勢 逆裏を捍ぎ撥う

打太刀 雷刀

使太刀 逆城郭に立ち、双方より進みよる。

打太刀 触刃境より裏を打つて迫る。

使太刀 鋒を下げ拳を上げて止め、左拳を以て打太刀の拳を拂い落し、右隻手刀を以て足を払う。

意思

これ疾く鋒を下げて拳を挙げ止める。順にして早し。影の形に應じるが如し。後迫る時は愈五箇の身なり。武蔵流〔円明流〕嚴の身なり。また近々の位、これ速やかに体より拳を拂う。隻手刀を以て敵の足を払う。相架け遠ければ碎かれる恐れあり。戒むべし。これまた後離れて勝つ。皆、変に應じるものなり。



三、下段〔八勢法〕

一 相架け 順

打太刀 雷刀

使太刀 下段にて相がかりに進む。

使太刀 下段の先を立てながら刃境内に入らんとする。

打太刀 首に打ち来たる。

使太刀 順に当たり、逆に打太刀の右腕に架け流す。

打太刀 また打つ。

使太刀 逆に当たり、順に打太刀の左腕に架け流す。

二 相架け 逆

打太刀 雷刀

使太刀 下段に立ち、相がかりに進む。

使太刀 進みより刃境内に太刀先を上げて入らんとする。

打太刀 首を打つ。

使太刀 逆に当たり、順に打太刀の左腕に架け流す。

打太刀 また打つ。

使太刀 順に当て、逆に打太刀の右腕に架け流す。

打太刀 また打つ。

使太刀 逆に当て、逆に打つ。即ち付け打なり。

意思

これ天狗抄、第二勢「明身」の、昔の進み向かう身なり。無刀の心、打たれて勝つ心なり。しかし敵の無拍子の打ちを戒むべし。

三入り身 順

打太刀 雷刀

使太刀 下段にて双方より進みよる。打太刀未だ打たざる前に、先を越し
て打太刀の左腕に付け合わせ、後一本、順に打つ。

四入り身 逆

打太刀 雷刀

使太刀 下段にして双方より進みよる。打太刀未だ打たざる以前に、先を
越して打太刀の右に逆に付け合わせ、順に打太刀の左手に反
し打つ。

意思

これよく水月を越すものなり。内に入りては先々の位、また枝葉書に云
く、敵に近づく時はひと思いに勝つべし。これ決断迅速を尊ぶなり。ま
た心遅き敵には太刀間に到つて我が身を動かさず、太刀の起りを知らし
めずして早く空に当たるの意。また漆膠しつこうの身〔田明流〕味わうべし。
もし触れて将まさに離れんとする時は、則ちその将に離れんとする所、勝負
の分かれる所なり。用心すべし。

五足を捍ふせぎ止める 順

打太刀 雷刀

使太刀 下段、双方進みよる。

打太刀 使太刀の足を打つ。

使太刀 順に受け止め、太刀を廻して逆に打太刀の右腕を逆に打つ。

打太刀 また足を打つ。

使太刀 逆に受け止めて、順に打太刀の左腕を打つ。

六足を捍ふせぎ止める 逆

逆は左足より始めるものにして前の通りなり。

意思

これ掣ひき〔切り〕さげに随つてとどめるものなり。当たり拍子なり。意は
高きにあつて、頓とんに〔急に〕下る習いなり。獸けを逐おう者は山を見ざるの
勢いきほを戒めるなり。獸けを羨うらやみて脚下あしもとを知るものなり。足を捍ふせぐ時、拳こぶしを高
くして両手を守るなり。よく見分け止めるものなり。また皆敵の拳こぶしを打
ち止める意あり。

七足を捍ふせぎ流す 逆

打太刀・使太刀とも前の如し。

打太刀 左足を打つ。

使太刀 手をもじりて逆に受け、順に打太刀の左腕に勝ち、次は順に受け
て逆に右手に流し架け打つ。

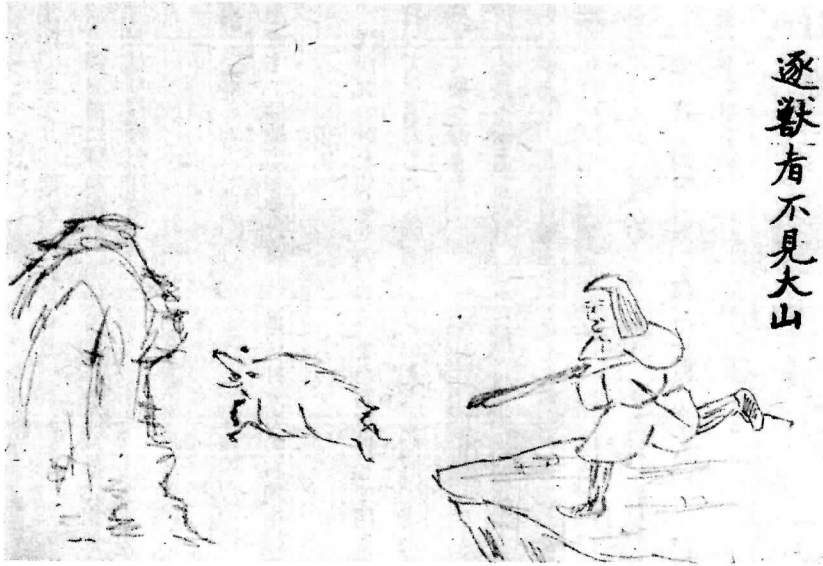
八足を捍ふせぎ流す 順

打太刀 使太刀の右足より打ち始める。

使太刀 前の如し。

意思

逐獸者不見大山



これ触れて架け流す拍子なり。地に著けて止めるも可なり。

右二十二勢法は雷刀より中・下段に打ち下ろして後、必ずこれによることあり。

中段・下段は如雲斎の好まざるところなり。高き構えに弥々高きを好む。予もまたこれに従う。ゆえに打ち下して後の変化のためにこれを挙げ。十答〔柳生利庵「始終不捨書」〕に云く、五箇の身を昔の教えの如く作るは悪し。身硬まり詰まるゆえなり。今は前を豊かにして、勝つとき五箇の意思善し。また云く、雷刀に向かい昔の如く附けるは悪し。狭きゆえなり。今の教えに、放つ位と云うことあり。また用いるときはこの意を用いる。また武蔵流〔円明流〕に心を放つて敵の動きに従うと云うことあり。そのまま先となると同じ。

四、相雷刀〔十三勢法〕

一 相架け 逆

打太刀・使太刀 雷刀にして進む。

打太刀 隻手刀となり、使太刀の肘を払う。

使太刀 疾く鋒を前に弾ね出し、刃中を肘にかけ、逆に相架け流し、順に

打太刀の右腕を打つ。

二 相架け 順

順〔逆を直す〕は順に相架け流し、逆に打太刀の右腕を打つ。

これ敵、我が腕・肘を切るものなり。また筋を外して切るもの同じ。また早く打つて尽きるもの、両刀太刀といえども同じ。また待曲の望むところを興えて勝つ意あり。

敵、我、二心持たざる意あり。また敵、单手、刀を以て終り打をなす時、勝ち二つあり。相架け勝ちと、越して勝つとの二つなり。これ腕より胸に至るものを捍ぐに便なるものなり。拳と腰とを捍ぐは迂なり。

腹・腰を捍ぐは大いに雷刀の本義を失う。また気は肩先、見分け目付け思ふべし。分け目〔両拳の間〕、擲〔両肘のかかり〕、これ肘より拳に至る間、また拳を見る善し。

三 止め打 順

打太刀 雷刀

使太刀 順城郭〔雷刀〕にして双方より進みよる。

打太刀 使太刀の拳を裏より払う。

使太刀 刀を下ろして逆に相架け止め、順に打太刀の雷刀にあげる左腕を打つ。

打太刀 また打つ。

使太刀 順に相架け流し、逆に打太刀の右腕を打つ。

四 止め打 逆

打太刀 雷刀

使太刀 順城郭〔雷刀〕にして前の如し。

使太刀 刀を下ろして順に相架け止め、逆に小手を打つ。

打太刀 また打つ。

使太刀 逆に相架け流し、順に打太刀の小手を打つ。

五 流し止めを兼ねる

打太刀 雷刀

使太刀 順城郭、相がかりに懸かる。

打太刀 首に打ち来たる。

使太刀 身を却きて大いに刀を横にし、順に相架け流し、逆に打太刀の腕を打つ。

打太刀 また打つ。

使太刀 逆に相架け流し、順に打太刀の左小手を打つ。

これ敵、我が拳あるいは腕を切るものなり。求めて腕を捍ぐ時は労多し。この勢は、まさに打たんとする時、変に應じてこれをなすものなり。これ敵を致すなり。既に水月を越される時は則ち止め難し。また流すと止めるを兼ねる勢は、敵の順逆、見分け難き時、身を引いて敵の拍子を迎えるなり。拍子を受ける心なり。この意を以て退いて受け止めるなり。

また敵、首を打つ、前勢と同じ。共に五つのものは、その実は雷刀の本義にあらず。

六 打落し

打太刀 雷刀

使太刀 雷刀に立ち、双方より進む。

打太刀 隻手太刀となり順に腹を払う。十文字と勝つなり。転し勝ちなり。

後、順に打太刀の小手を打つ。

七 打落し後、弾ねるを止める

打太刀 前の通り順に腹を打つ。

使太刀 近く打落す。

打太刀 逆に下より弾ねる。

使太刀 逆に打止め、順に打太刀の左腕を打つ。

本伝十文字の勝ちなり。敵、我が腹・腰を切るものなり。後の打ちは尽きざらしめんためなり。これ手あるいは足に勝たんと欲するときは勞多し。また筋をさけて打つものは合し難し。ゆえに相架けと越して勝つとの二つを用いるなり。しかれども雷刀の本義は「英雄の心を知る、是極一刀」の意なり。またはねるを止める勢は即ちその形に随つて押き止めるなり。

八 外し打

打太刀 浅く使太刀の手を順に隻手太刀にて払う。

使太刀 外して順に先打ち。

九 外して後、弾ねるを止める

打太刀 順に浅く手を切る。

使太刀 後ろに外す。

打太刀 逆に下よりはね上げる。

使太刀 近く打止め、打太刀の小手を順に打つ。

十 外して後、打落す

打太刀 逆に浅く手を切る。

使太刀 後ろに外す。

打太刀 順に腹を切る。

使太刀 打落す（十文字勝ち）。

打太刀 揚げる。

使太刀 順に左手を打つ。

意思

これ敵、浅く手あるいは足を切るものなり。いわゆる越して勝つものなり。また下を払い打ちにするとき、よく神妙剣と水月とを計り、外し越して勝つなり。これまた同じ。すべて遠々の位また敵に趨く勢強きときは自ずから中らざる位あり。越さざる所の位なり。懸かつて待つ心なり。武藏流〔田明流〕に云く、身は懸る身にして足と心を残し、敵の心を動かす。また二の越し、或いは身を以て打ちを示す時、太刀は自ずから後より打つ心なり。この意、味わうべし。また嶺を見て谷を知る・一節二打の機を知つてこれに応ずるもの・過〔止〕弾勢・打落し勢これなり。これ神妙剣と水月とを計るものなり。また太刀の鋒動きあらば調子に乗りて打つべし。また弾ねるを止めるものは近く打ち止めるなり。

十一 坐おかしき打

打太刀・使太刀とも相雷刀にて進む。

打太刀 順に低く足を切る。

使太刀 真直まぢくぐにその手を折りしきながら打つ。

打太刀 折りししく。

意思

これ敵、足を切るものなり。正路はこの勢の如し。嶺谷を合するものなり。一節機、中筋を打つものなり。

十二 下を打つを止める 順

打太刀 雷刀

使太刀 雷刀、互いに進みよる。

打太刀 刃境より深く順に足を切る。

使太刀 左足を前にしている。

打太刀 足を切る。

使太刀 左足を後へ引き、順に打止め、身を我が左に転じて逆に打太刀

の右手に勝つ。

十三 下を打つを止める 逆

右に同じ。

打太刀 逆に深く足を切る。

使太刀 右足を後に引き逆に打止め、右に転身して打太刀の左腕を打つ。

子刀

敵 雷刀を境外に下ろし撞つき来たる。

我 十字と打落す。

敵 逆に廻刀して右足を切る。

我 右足をひき逆に打止め、敵の左手に勝つ。

意思

これ敵、首と足を換えんと欲して深く来たるものなり。我が意、嶺にありて頓とまに〔急に〕谷に下る習いなり。高下・進退、自在を得せしめるものなり。これ近きもの、撞つき或いは弾ねる。遠きは打つなり。これ、始め開き止めるものなり。近く打ち下ろし退き変わり止めるものなり。心持に云く、本伝、嶺谷を合するものなり。

右十三勢法は本伝ほんでん勢と異なるものありといえども、しかもまた敵の変化に従って常形なきを知り、一に泥ねまざるを念となすものなり。

五、雷刀〔七勢法〕

一 雷刀、城郭を攻める 順

打太刀 順城郭

使太刀 雷刀、双方より進みよる。打太刀の左拳を打つ。

打太刀 却かき止める。

使太刀 逆に打太刀の裏を打つ。

打太刀 刀を返し打止め、使太刀の首を打つ。

使太刀 疾く弾ね上げ逆に相架け流し、順に打太刀の手を打つ。

二 雷刀、城郭を攻める 逆

打太刀 逆城郭

使太刀 雷刀に進み、打太刀の拳を打つ。

打太刀 却き止める。

使太刀 裏を打つ。

打太刀 打止めて使太刀の首を打つ。

使太刀 疾く順に相架け流し、逆に打太刀の右手を打つ。

三 雷刀、足を打つ

打太刀 順城郭

使太刀 雷刀、互に進みよる。

打太刀の左拳を打つ。疾く左足を踏み込み、刀を廻して或いは左

肩にとり、打太刀の足を逆に打つ。

打太刀 首に来たる。

使太刀 逆に相架け流し、順に打太刀の左手を打つ。

意思

枝葉書云く、大手捌手何れの勢、何れの勝ちも、この二つのものの外を出でず。これ西に声して東を攻めるものなり。正兵・奇兵なり。またその首を警めて、その手・腹を打つものなり。また表裏の勝ちも同じ。また打ちは磔打をよしとす。また拍子ある勢には付けて打つべし。この意も兼ねるなり。また初め我もまた知らずの打ちの意あり。また後の変動は低きより疾く高きに昇るの自由を得せしむ。また相架けは疾く当たる拍子の相懸けなるものなり。また始め妄りに打つことなかれ。必ず打

つべきの打ちを以て打つものなり。また一理の位もまた思うべし。一理の位とは撞くを心にかけることなり。動かざれば敵刀を弾ねて手に勝つ。

四 雷刀、下段の相架けを打つ 順

五 同

打太刀 下段

使太刀 雷刀にて進み、鑿ぎわ一尺前を打ち、境内に入らんとす。

打太刀 却いて使太刀の首を打つ。

使太刀 相架け流し、順逆二本相架け。

順は右足前にて、逆は左足前にて使うものとす。

意思

これよく下作りして出づるものなり。先ず試み打なり、即ち両一尺の打ちなり、位分け待曲〔敵が技を出すのを待つて勝つ〕なり、ゆえに深く打つは好まじからず。いわゆるこれに触れて敵の働きを知るものなり。また、敵の不意を打って動きなきときは、あえて進み打つを可とす。これ棒心なり。心持に云く、両一尺の打ちなり。また棒心の打ちなり。いわゆる、これに触れて有餘・不足の処を知るものなり。

六 雷刀、下段の入身を打つ 順

七 同 逆

打太刀 下段

使太刀 雷刀にして相進む。

打太刀 刃境より順に左腕に付け来たる。

使太刀 疾く身を打太刀の左脇下を順に打ち迫り刀背をとりて撞く。

打太刀 却いて使太刀の首を打つ。

使太刀 順に相架け、逆に打太刀の右手を打つ。

逆は、

打太刀 左足前に右腕に付け来たる。

使太刀 右に転じて、打太刀の右脇下を打ち迫り、刀背をとり撞く。

打太刀 却つて使太刀の首を打つ。

使太刀 逆に相架け順に打太刀の左手を打つ。

意思

高きより頓に「急に」下がる。枯枝を折る勢の意あり。頓に身を投じて藻の下に入る。「高きから急に低く転ずる」早く繫縛を絶つものなり。

撃石火・閃電光の機なり。また早く機を知るときは則ち、眼は嶺に在り、意は谷に在り。気を合わせ体を張り待つ。頓に放つて入るなり。これ待曲の一教なり。また彼我二心持たざるの意なり。また打つて後必ず撞くなり。迫るときは截ること疑わざるゆえなり。必ず二刺するを善しとす。

右七勢法は前二十二勢法の中・下段、雷刀を打つゆえ、ここに於いてまた雷刀、中・下段を打つことを教えるなり。

六、雷刀〔八勢法〕

一 雷刀、下段を砕く 逆

二 同 順

打太刀 下段

使太刀 雷刀にして相進み、交刃境にいたり虚打して敵情を探る探り打を

し、また足を却けて雷刀に上げ、逆に先打する。

打太刀 逆に相架けて順に首に打ち来たる。

使太刀 疾く手を下げて順に止め、拳倒してまた打つ。

順は前の通りにして順に先打す。

打太刀 順に相架け逆に首に打ち来たる。

使太刀 逆に手を下げて止め、拳倒してまた打つ。

意思

これ福衣また打ちかむせるものなり。敵に趨く下上の意、また棒心も拍子もまた我が心に任す。推し付けて闘うときは何時もこれをなす位、また働かして勝つ。始め探打して附け打を察し、後、礫打を以て先打をなす。一打三足、没滋味の拍子なり。

また声稚また一超直入の心、また強くして尽きざる打ちなり。高きより頓に「急に」手を下げて突き出すものなり。よく越し迫るものなり。また打ちは身連れざる打ち、また身を動かさず太刀の起りを知らしめして早く空に中るの打ちなり。

三 雷刀、城郭を砕く 使太刀逆

打太刀 順城郭

使太刀 雷刀にして相進む。

使太刀 左足を進めて裏より打太刀の肘を打つ。

打太刀 架け流して使太刀の首を打つ。

使太刀 左掌を以て打太刀の両拳を受け取り、隻手刀を以て打太刀の胸あ

るいは腹を二刺す。

四 雷刀、城郭を砕く 使太刀順

打太刀 逆城郭

使太刀 雷刀にして相進む。

使太刀 前の如く順に打太刀の裏より肘を打つ。

打太刀 鋒を下げ拳を上げて架け流し、使太刀の首に打ち来たる。

使太刀 順に相架け、逆に低く打太刀の足を切る。

意思

よく下作りして出づ。正兵を以て遠きより虚空懸かりをなし、その首を警めてその脇を打つものなり。上下なり、大拍子なり、後拍子なり。

また切る拍子もまた好む所ありの意、敵を推し付けて闘うものなり。また上を残し下を盗む。一超直入またよく近く迫るものなり。突き仆す意にして取る。太刀間三尺の教え、進み迫る足、善し。始めは手を高くし後は手を下げるものなり。至大至剛、独往独来、万法皈一、また懸々の位なり。

五 雷刀、雷の相架けを砕く 順

六 同 逆

打太刀 使太刀とも雷刀にて進みよる。

使太刀 疾雷刀の如く打太刀の左手を順に先打す。

打太刀 相架け流し使太刀の拳を却き打つ。

使太刀 疾く拳を下げて打ち止め進む。

打太刀 退きてまた拳を打つ。

使太刀 これを打ち止め進む。

打太刀 また打つ。

使太刀 また打ち止め進む。

打太刀 また打つ。

使太刀 拳を首上に揚げて外し、打太刀の首または手に勝つ。

使太刀 三本打止め、四本目、上に外す。

別に必ず三本四本と定めたるにはあらざれども今仮に定む。

逆は、

逆に左足を踏み込み打太刀の右手を先打し、余は前に準じて使えばよし。

意思

これまた敵を推し付けて闘うものなり。懸々の位なり。打つ時、つまだて進むこと悪し。飛び入るが如きも悪しきなり。よく水月を越すものなり。また水月を越さんと欲して却つて水月を越されることなけれ。上を残し下を盗む。また水月位を奪うの意。また身は打つ勢いを示して心と太刀とを残し、空より強く敵の気の間隙を打つ。順逆これに従う。打つて後、疾く拳を引き下げて止む。捍ぎ打つて撞き迫るものなり。調子に乗つて打つ意なり。

七 雷刀、雷の止め打ちを砕く 順

八 同 逆

打太刀 雷刀

使太刀 雷刀、ともに相進む。

使太刀 順に打太刀の手を打つ。

打太刀 順に架け止め、逆に使太刀の拳を打つ。

使太刀 右拳を反して下がり止め、左手、打太刀の拳を捉えて胸を撞く。

逆は、

使太刀 逆に打太刀の手を打つ。

打太刀 逆に架け止め、順に使太刀の拳を打つ。

使太刀 拳を反して打ち止め、右手、打太刀の拳を排し〔おしのけ〕、左手にて胸をつく。

意思

これまた敵を押し付けて闘うものなり。片手刀となり、手を反して止む。近く迫りて撞き倒すものなり。越して後、無刀取りの意。

右八勢法は敵を抑える位を練る。先を弛めざるものなり。皆初め打つて持つて入り、近く打つて迫る。氣、敵を覆うものなり。

勢、敵を打碎かんと欲す故に、敵偏に打碎かれざることをなす。我れその虚を打つ。これ人を致すものなり。また正兵なり。また高きより疾く低きにおもむく意あり。また先ずは先に旋る意あり。

七、相雷刀〔三勢法〕

一 左変

打太刀 雷刀

使太刀 雷刀、相がかりに懸かる。

打太刀 我が首を堅打に來たる。

使太刀 斬釘の変わりと同じく、疾く右肩を却けて左に轉身して、打太刀の右手を近く斜に打つ。

打太刀 迫り着く。

使太刀 左に遷りながら上より打ち、前足を却きながら下より打太刀の拳を弾ね上げ退る。

打太刀 首に打ち來たる。

使太刀 順に相架け、逆に打太刀の手を切る。

二 右変

使太刀 前同様、右に轉身して打太刀の左手を打ち、また順に上より小手を打ち、逆に下より拳をはね上げ退く。

打太刀 首に打ち來たる。

使太刀 逆〔に〕相架け流し、順に打太刀の手を打つ。

意思

これ斬釘と同じ。強く肩を開く好し。すべて身を転じるものは、肩を開き肩を以て敵に当たる善し。

小太刀一尺五寸の外しの教えもまた理は一つなり。また敵の働き大なれば、その調子に乗り、角に退きて打つべし。また次の打ちは勢を取って打つものなり。足を切る、手を弾ねる、これ、その宜しきに從う。

また始め僅かに左に移る形を示して、節に応じ疾く変るもまた好し。後の打ちは常理を敵に示して変わるものなり。奇正なり。茂拍子の意もこれあり。また進んで先転して打つ、また好し。

三 足を坐き打つ

打太刀・使太刀とも雷刀にて進みよる。

打太刀 大いに踏み込み首に打ち來たる。

使太刀 疾く身を沈めて、脚下に迫る太刀を順にして足を押える。

打太刀 勢いあまつて前に転倒する。

使太刀 身をかわり、後を真直ぐに打つ。

意思

敵の進み来たる勢を受けて身を反るが如くして敵に当たるなり。節に
疾く沈みて、深く脚下に迫るものなり。下上の意、敵におもむくに、
伸びる身あり、思ふべし。これと雷刀下段入り身を打つ勢と同意なり。
高きより疾く下に投ずるものなり。

枝葉書、藻ノ下歌云う、

越さばぬれ越さでかなわぬ深瀬こそ

身を捨てぬるは浮かぶべきため

また高曲・下曲、二心持たざる意、また太刀連の意もこれあり。一調子
なり。眼は嶺にあり、意は谷にあり。これ二目遣い、また先打の意これ
あり。気を盗むものなり。

右三勢法は前勢に應じるものなり。

これ獸を逐つて大山を見ざるものを打つ勢なり。

八、相雷刀合し抑え〔三勢法〕

一 順 捻り

二 逆 捻り

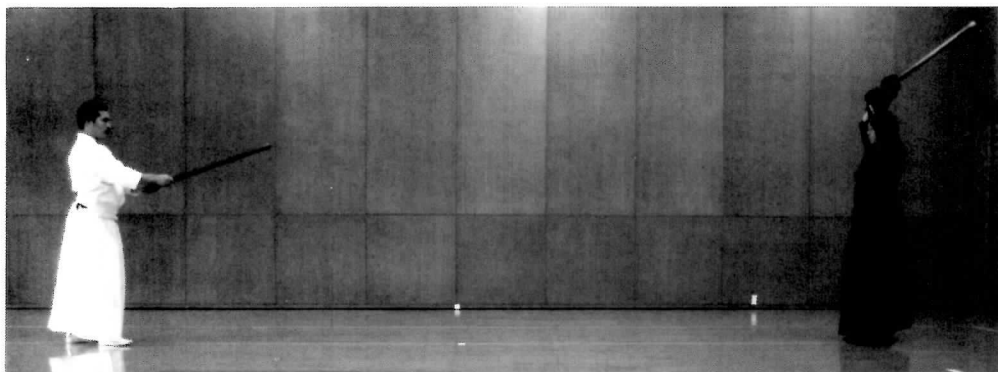
三 引き下げ

右三勢法は後に伝えるなり。

総計六十四勢法なり。これ房成作るところいへども、しかも初学をして
身体練習、順逆の変動、眼はよく上下左右の来刀を分け、心機よく遠近
の境に應じ、遠近の境の緩急の節に中ることを得せしめんがためのもの
なり。初学これを得ざるときは、則ち向上の勢法もまた警者〔盲人〕の
眼鏡、法師の櫛となるなり。篤信するものあらば先ずこれによらしむべ
し。およそ試合をなすの法は、正しく立ち、明らかに観て、勢強く進み、
足を留めることなかれ。閃を越されることなかれ。まさに強く触刃境に
入らんとして、敵打ち出す時は、疾くこれに應じて勝ち、未だ打ち出だ
さざる時は入つて速やかに先に打つ。すべて應じる所の術、皆この勢法
にあるなり。交刃境に臨み己が妄魔を捨てて、この自然の勢に任せて
敵に應ずべし。またこの道は神速を貴ぶ故に、撃捍すべて疾刀を使うこ
と善し。敵見ることあたわず、我もまた知らざるに至る。また変動尽き
ることなかれ。また身、便ならざる所ある時は撃つことあたわず。則ち
常にしばしばその便ならざる所に当たる勢法を使って、よく便にすべし。
また身、打たれる所ある時は、その打たれる所の勢法あるいは変勢を使
うべし。その使法は、先ず緩く使つて刀路を習い、刀路を得て後、その
急節を習う。急節を得るときは、則ちその打たれる所を打たれず。日々
かくの如く我が間隙を修めて、敵の間隙を失わざることを求むるときは、
則ちよくこの変極を尽くすことを得。ゆえに試合はやはりこの勢法の
間析なり。

試合勢法 第一終

試合勢法「中段」



一本目
打太刀 雷刀に構える。
使太刀 中段直勢に構える。



相懸かりに進む。



打太刀 間境で打太刀の拳を打つ。
使太刀 太刀を頭上に外し、

打太刀 下村幸裕 (右) 使太刀 赤羽根大介



使太刀 打太刀の頭を打つ。
打太刀 太刀を頭上に外し、



打太刀 使太刀の頭を打つ。
使太刀 これを順に相架け流す。



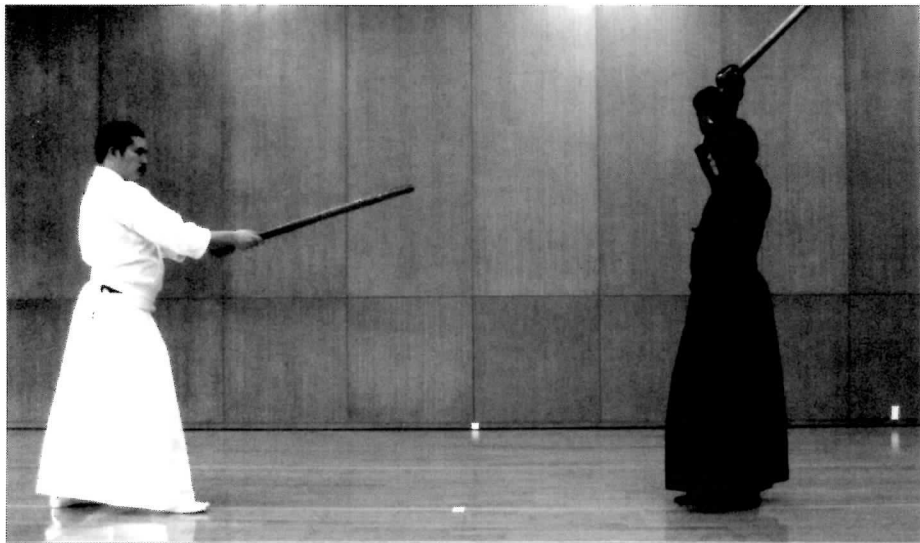
打太刀 太刀を頭上に上げる。
使太刀 打太刀の右小手を打つ。



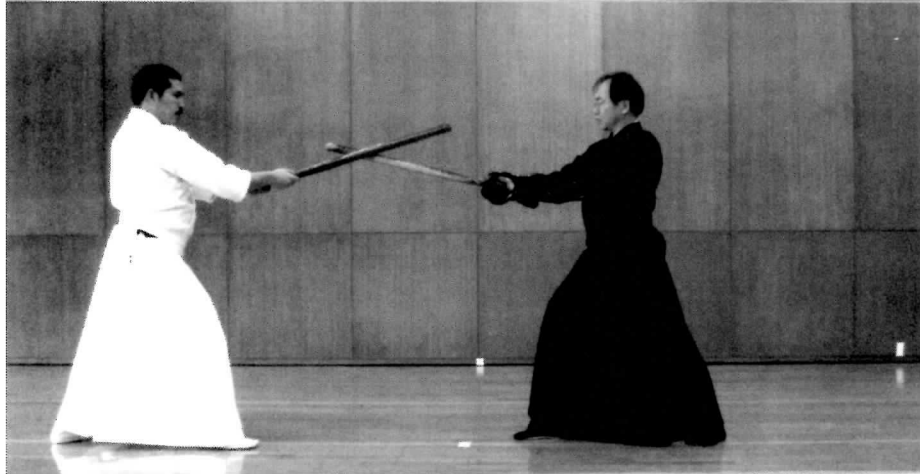
打太刀 打太刀
使太刀 逆に相架け流す。
また頭を打つ。



打太刀 打太刀
使太刀 太刀を頭上に上げる。
打太刀の左小手を打つ。



二本目
打太刀
使太刀
雷刀
順の城郭勢に構え、
相懸かりに進む。



打太刀
使太刀
間境で使太刀の左拳を打つ。
打太刀の咽元を攻める勢いを太刀先に
持たせ、打太刀の太刀を左斜め下
に僅かに打ち落とす。(剣先は喉元に
付けられる。和卜勝ち)



使太刀
打太刀
一步退いて、左拳を上げて太刀先下がり
に構える。
〔剣先は打太刀の咽に向け、左拳で打ちを誘う〕
別の仕方・元の城郭勢に戻る。
太刀を頭上に振りかぶる。



打太刀 左拳を打っていく。
 別の仕方では頭を打っていく。
 使太刀 打太刀の太刀に順に当たり、逆に架
 け流す。



打太刀 太刀を頭上に振りかぶる。
 使太刀 右拳を打つ。



打太刀 頭を打っていく。
 使太刀 逆に当たり、順に架け流す。



打太刀 太刀を頭上に振りかぶる。
使太刀 左拳を打つ。



打太刀 右脇腹を逆勢に打つ。
使太刀 右足を踏み込み、太刀を右肘にかけ、
打太刀の太刀を当てる拍子に防ぐ。



打太刀 太刀を頭上に振りかぶる。
使太刀 左斜め上に太刀を振り上げ、
逆に右拳を打つ。



打太刀
使太刀 左脇腹を順勢に打つ。
左足を踏み込み、太刀を左肘にか
け、打太刀の太刀を当たる拍子に
防ぐ。



打太刀
使太刀 太刀を頭上に振りかぶる。
右斜め上に太刀を振り上げ、
順勢に左拳を打つ。

写真省略

打太刀 右拳を打つ。
使太刀 右足前から左足前へと足を踏み替えると同時に、
太刀も順から逆に替えて右拳への打ちを防ぐ。
太刀を頭上に振りかぶる。
打太刀 右足を踏みこんで、順に打太刀の左拳を打つ。
使太刀 使太刀の左拳を打つ。
打太刀 和ト勝ちに打太刀の太刀を左下に打落す。
使太刀 太刀を頭上に振りかぶる。
打太刀 左足を踏み込んで、逆に打太刀の右拳を打つ。
使太刀 頭を打つ。
打太刀 逆に当たり、順に架け流す。
使太刀 太刀を振りかぶる。
打太刀 左拳を打つ。
使太刀 頭を打つ。
打太刀 順に当たり、逆に架け流す。
使太刀 太刀を振りかぶる、
右拳を打つ。



三本目
打太刀
使太刀
雷刀
逆城郭勢に構え、
相懸かりに進む。



打太刀
使太刀
間境にて深く頭を打つ。
当たる拍子で打太刀の太刀を下から
逆勢に撥ね上げ、



使太刀
打太刀
右九十度〔目安〕に轉身しながら相架け流しに
太刀を廻して打太刀の左小手を順に打ち、順に
引き下がる。
使太刀に向き直る。



打太刀 頭を深く打っていく。
使太刀 今度は順勢に撥ね上げ、



使太刀 左九十度（目安）に轉身しながら
相架け流しに太刀を廻して打太刀の
右小手を逆に打ち、逆に引き下がる。
打太刀 使太刀に向き直る。



打太刀 頭を深く打っていく。
使太刀 逆勢に撥ね上げ、



使太刀 右に轉身し、順に打太刀の左小手を打って、下る。



打太刀 頭(左側頭)を打っていく。
使太刀 順に相架けるや、



使太刀 左手を付け打つ。
打太刀 頭(左側頭)を打っていく。
相架け・付け打を三度繰り返す。

使太刀 四度目に相架けるや、



使太刀 逆に轉身して右小手を打つ。
打太刀 頭（右側頭）を打っていく。
逆の相架け・付け打を三度繰り返す。

（注）使太刀は打太刀の後ろに廻り込むように付け打つ。それに応じ打太刀はそれを防ぐように使太刀にそのつど向き直る。結果として打太刀を中心にして左廻り・右廻りをすることになる。

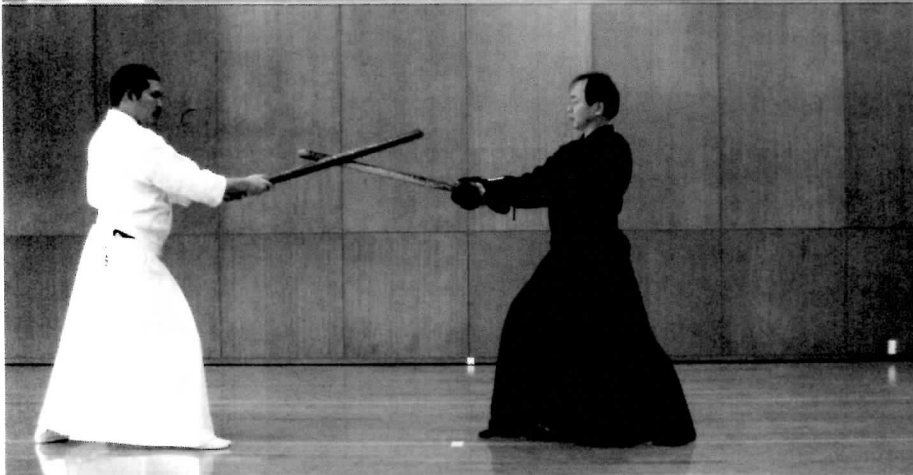
四本目
打太刀
使太刀

雷刀
順城郭勢に構え、
相懸かりに進む。



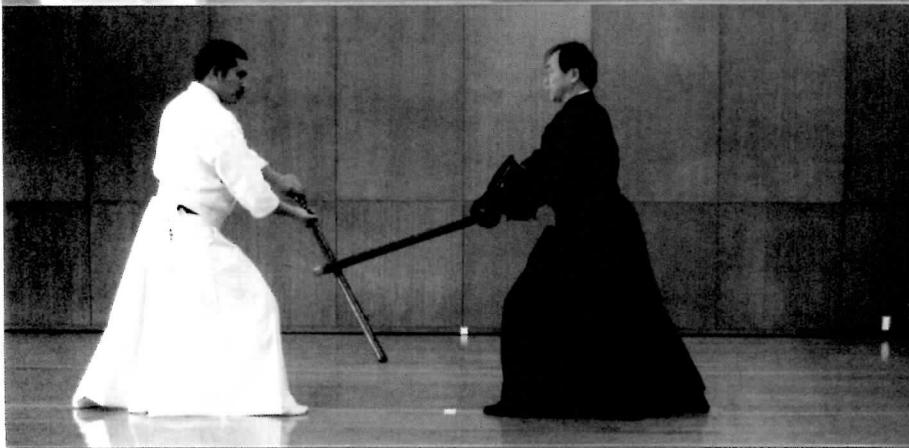
打太刀
使太刀

間境にて使太刀の左拳を打つ。
順に受け止める。(和卜)



打太刀
使太刀

足を踏み替えて前の右足を逆に打つ。
すくい上げるように鋒を下げて受け止める。





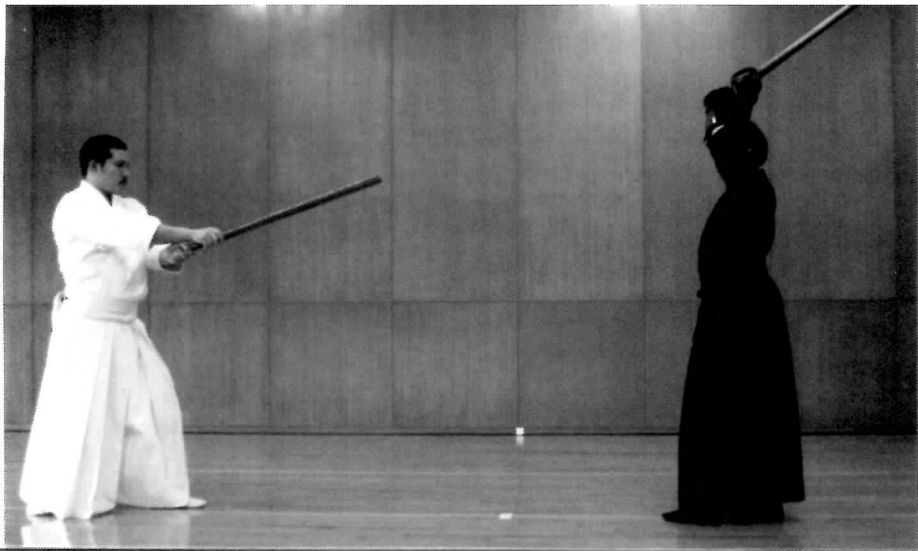
打太刀 太刀を大きく廻刀し、



打太刀 足を踏み替えながら、順に前の右足を順に打つ。
使太刀 鋒を下に突き刺すよう下げて、刃で順に受け止める。



打太刀 太刀を振り上げる。
使太刀 左足を小さく踏み込みながら、廻刀して、逆に打太刀の右小手を打つ。



打太刀
使太刀
雷刀
逆城郭に構え、
相懸かりに進む。



打太刀
使太刀
間境にて左足を踏み込み、使太刀の拳を打つ。
左足を半歩引いて、太刀を頭上に取り上げて打ちを引き外し、



使太刀
打太刀
右足を踏み込み、打太刀の頭を打つ。
打太刀 逆に相架け、太刀を頭上に振り上げ、



打太刀 右足を踏み込み、打太刀の左横面を打つ。
使太刀 左足を出しながら太刀を左脇に立てて、
順に当たり受け、



打太刀 太刀を振りかぶる。
使太刀 太刀を真直ぐに伸ばして右小手を打つ。



打太刀 逆に使太刀の足を打つ。
使太刀 逆に受けとめ、左から大きく廻りし、



打太刀 太刀を振りかぶる。
使太刀 順に打太刀の左小手を打つ。



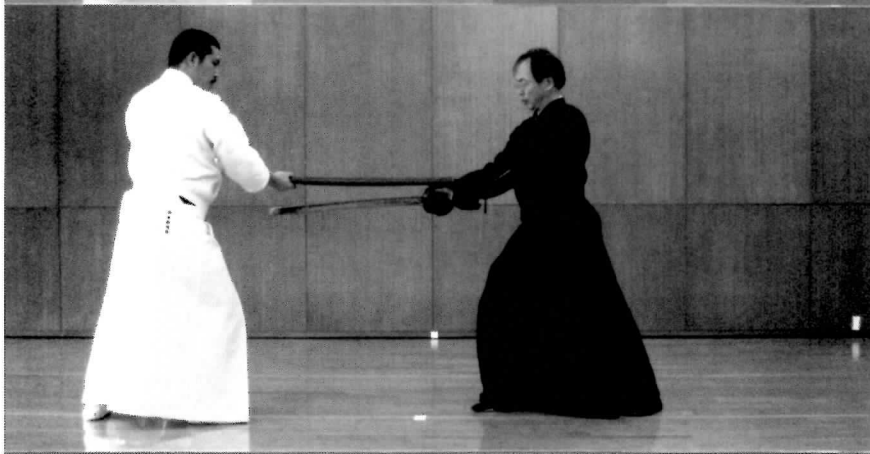
六本目
打太刀
使太刀

雷刀
順城郭
相懸かりかかる。



打太刀
使太刀

遠間から高く頭を打っていく。
僅かに体を右に捌きながら、手を反
して左拳を左目の斜め上に高くあげ
ると同時に、打太刀の太刀に付けの
る拍子にのり、



使太刀

打太刀の太刀・手、ともに太刀の
背で下段に下げ抑え、



使太刀 小さく打太刀の両拳を打って、
そのまま順城郭になって退る。
打太刀 太刀を振りかぶり、



打太刀 頭を深く打っていく。
使太刀 順に高く相架け流し、



使太刀 左斜め前に轉身して右脇腹を真横に切る。



七本目
打太刀
使太刀
雪刀
逆城郭、身を低くして、
相懸かりに進む。



打太刀
使太刀
走り込みながら、間境より頭を深く打つ。
左足を踏み込み、下から当たる拍子を以
て打太刀の太刀に高く相架け、



使太刀
深く入身して左手で打太刀の右脇の下を突
く。または右肘を右斜め前に突き抑え、打太
刀の体を頭す。太刀は打太刀の脇腹に付ける。

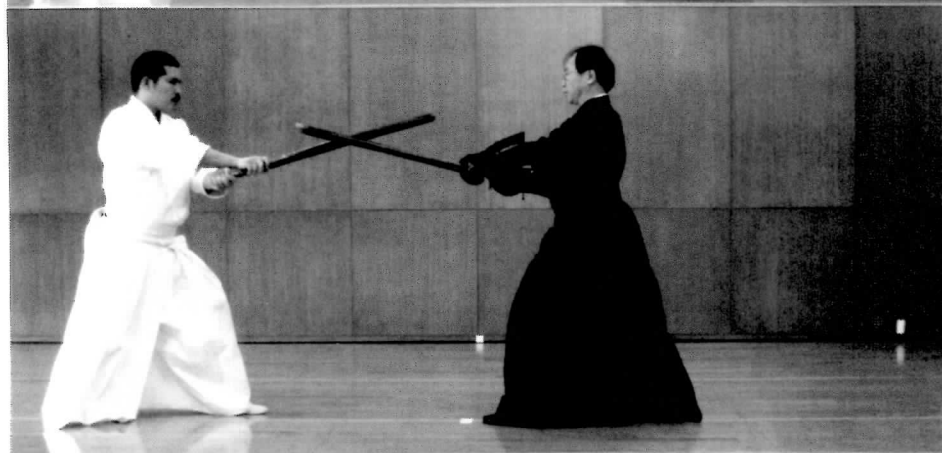
八本目
打太刀
使太刀

雷刀
順城郭、剣先を僅かに左にずらし、
右拳を見せ、相懸かりに進む。



打太刀
使太刀

間境より使太刀の右拳を逆に打つ。
足を踏み替え、手を反して
逆に止める。



打太刀
使太刀

太刀を振りかぶる。
太刀を右斜め前に上げて、
順に打太刀の左小手を打つ。





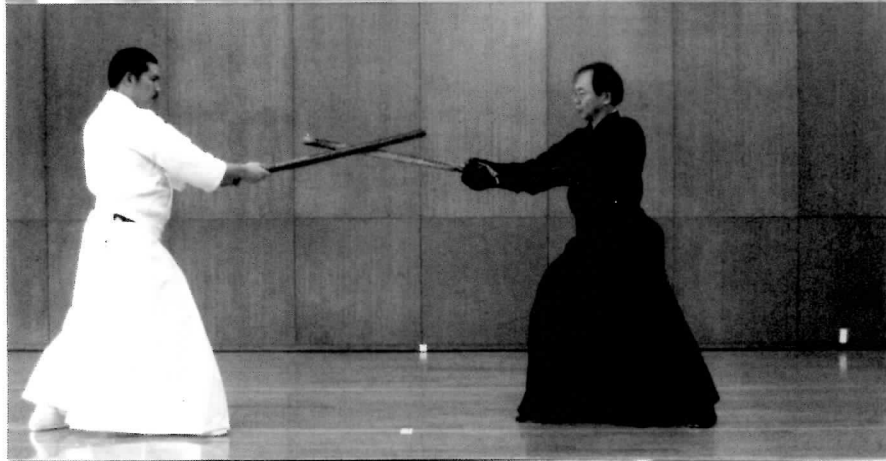
打太刀 首に打ち来たる。
使太刀 左足を出しながら刃でもって順に当て、
左肩上に太刀を振りかぶり、



打太刀 太刀を振りかぶる。
使太刀 逆に打太刀の右腕を打つ。



九本目
打太刀
使太刀
雷刀
逆城郭、剣先を僅かに右にずらし、
左拳を見せ、相懸かりに進む。



打太刀
使太刀
間境より使太刀の左拳を順に打つ。
足を踏み替え、手を反して順に止める。



打太刀
使太刀
太刀を振り被る。
太刀を左斜め前に上げて、逆に打太刀の右
小手を打つ。



打太刀 首に打ち来たる。
使太刀 右足を出しながら刃でもって逆に当て、
右肩上に太刀を振りあげる。



打太刀 太刀を振りかぶる。
使太刀 順に打太刀の左腕を打つ。

十本目
打太刀
使太刀

雷刀
順城郭に構える。
相懸かりに進む。



打太刀
使太刀

觸刃境しよくんきょうより使太刀の右脇腹を打つ。
左拳を左上に上げ、右腕で太刀を支え、打太刀の打ちを当たる拍子で受け、



使太刀

速やかに右拳を以て打太刀の拳を拂い落し、





使太刀 逆に左隻手刀となりて打太刀の足
(右膝裏を払う)。

十一本目
 打太刀 雷刀
 使太刀 逆城郭に構え
 相懸かりに進む。



打太刀 触刃境しんていざかいより使太刀の左脇腹を打つ。
 使太刀 右拳を右上に上げ、左腕で太刀を支え、打太刀の打ちを当たる拍子で受け、



使太刀 速やかに左拳で以て打太刀の拳を
 払い落し、





使太刀 順に右隻手刀となりて打太刀の足
(左膝裏を払う)。

第105回 全日本剣道演武大会 (京都大会)

平成21年5月2日 京都武徳殿



新陰流兵法「三学門の太刀・古伝」 打太刀 毛利圭介 使太刀 藤原正道

試合勢法 第二

一、相雷刀〔七勢法〕

一 中段に形して迎える

打太刀・使太刀とも雷刀にて進む。

使太刀 刀境外より直中段に変じて水月を越さんとす。

打太刀 首に打ち来たる。

使太刀 順に相架け流し、打太刀の右手を打つ。

打太刀 また打つ。

使太刀 逆に相架け流し、打太刀の左手に勝つ。

意思

これ迎えなり。空の拍子に云う、敵の動き始まる心を知る、茂拍子なり。

心地諸種を含む。また色に著き色に従う。また待曲、また表裏の勝ち。

また餌飼、また一打して働かして勝つ意もまた同じ。また位を奪う、

また敵の拍子を受けるの心、皆味わうべし。これ打下げて進む意なり。

手伸び過ぎずして予め、相懸けの意を含む。

目付け拳のみ。

二 青岸に形して迎える 順

三 同 逆

打太刀・使太刀とも雷刀にて進む。

使太刀 交刃境に於いて青岸に変じて迎える。

打太刀 拳を打つ。

使太刀 上げ外して逆に首を打つ。

打太刀 相架け首に来たる。

使太刀 逆に相架け、順に打太刀の左手を切る。

打太刀 また打つ。

使太刀 順に相架け流し、逆に打太刀の右手を打つ。

逆は、相雷刀より、

使太刀 逆青岸に下ろす。

打太刀 打つ。

使太刀 上げ外し順に打太刀の首を打つ。

後打二本とも前に同じ。これ敵引けば前に進み、敵進めば後に退り、自由を使うことよし。しかれども常に使う処は、使太刀、前進するものとする。

意思

これまた藻拍子なり。高曲なり。相懸けは易く外すは難し。よつて先ず避けるを練らしむ。

四中・下の間に形して迎える 順 相架け退り打

打太刀・使太刀 雷刀にて進みよる。

使太刀 交刃境外より順に中・下の間に刀を下ろして迎える。

打太刀 首に打ち来たる。

使太刀 順に相架け、退り打ちに打太刀の右腕に逆に勝つ。

打太刀 また進んで打ち来たる。

使太刀 退いて逆に相架け流し、順に打太刀の左手に勝つ。

五中・下の間に形して迎える 逆轉身

打太刀・使太刀 前の如く進む。

使太刀 交刃境外より逆に中・下の間に下ろす。

打太刀 深く首に打ち来たる。

使太刀 調子にのり、隅かけて除き打つ。

始め逆に相架け流し、右に轉身し、後は順に相架けて左に轉身し、打太刀の右腕に勝つ。

意思

これまた藻拍子なり。上と同じ。また引いて迎える意もあり。また遠近に云う、角にかかつて却き打つべきの意あり。

これ迎えて待つものなり。表裏の勝ちなり。架・転は調子に乗り、隅かけて除き打つ意あり。

六 躑がしく来たるを打つ 順

打太刀・使太刀 相雷刀に進む。

打太刀 躑来して青岸に変わる。

使太刀 その表を打つ。

打太刀 刀を反して使太刀の右鬢を打つ。

使太刀 逆に打止め進む。

打太刀 左鬢を打つ。

使太刀 順に打止め進む。

打太刀 右鬢を打つ。

使太刀 逆に打止め、打太刀の拳を止めて隻手刀となりて撞く。

七 躑がしく来たるを打つ 逆

打太刀 雷刀より青岸に変わる。

使太刀 その裏を打つ。

打太刀 刀を反して使太刀の左鬢を打つ。

使太刀 直ちに止め、右手、打太刀の拳を止め、左隻手刀となりて撞く。

二、相城郭〔三勢法〕

八順

打太刀・使太刀とも順城郭に立ち、進む。

打太刀 使太刀の太刀先三寸につけて、使太刀の拳三寸を打つ。

使太刀 引き止めて打太刀の三寸を打ち、下より弾ね上げ、上より真直ぐに十文字と打つ。

九逆 敵・順

打太刀 順城郭

使太刀 逆城郭

打太刀 使太刀の拳を打つ。

使太刀 引き止めて直に打太刀の拳を打つ。

下より弾ね、上より打つこと前に同じ。

十順 敵・逆

打太刀 使太刀の拳を下より打つ。

使太刀 刀を反して逆に打止め、打太刀の拳を付け打ち、下より弾ね、上

より打つこと前に同じ。

意思

初勢は三寸二つの習い、また拍子ある構えには著けて打つべしとの意。また次の二勢は昔の嶺谷の教えなり。これ敵の鋒下に我が鋒を入れるなり。我が鋒、上なるときは大いに背くなり。しかりといえども始めは上にして出て、所に到って下に入れて打つものは善し。

三、相下段〔五勢法〕

十一 先打

打太刀・使太刀とも下段にて進む。

使太刀 境外にて雷刀に揚げる。

打太刀 触刃境に入つて刀を揚げる。

使太刀 疾雷刀の如く打太刀の左手を順に先打する。

十二 後れ打

打太刀・使太刀とも下段にて進む。

使太刀 境外にて雷刀に上げて迎える。

打太刀 また揚げて先に打ち來たる。

使太刀 疾く身を沈めて深く迫り、順に打太刀の左脇下を打ち、右手、刀

背を取つて撞く。

打太刀 却いて使太刀の首を打つ。

使太刀 順に架け流し、逆に打太刀の右手に勝つ。

相下段先打の意思

昔の水月、活人刀、また挙げる所は今の活する位なり。一の太刀連また連拍子、また昔の風水の音もまた意、似たり。また水月、前者待ちにして内に入つては先々の位なり。また武藏流〔田明流〕心の章に云う、心を水となし、折に触れ事に応じる心なり。味わうべし。また鋒動きあるときは調子に乗りて打つ意、同じ。

心持に云う、始め下段を打砕かんと欲して刀を揚げるなり。後、連拍子、掣電、これ敵の揚げる処は内、我れは外なり。後れ打は、雷、下段入身を打つ勢、揚げる所は迎えなり。心は藻の下にあり。合し打は、敵推し來たる、あるいはまさに拳を捉えんとす。ゆえに勢を取つて隅に却き打つ。まさに拳を捉えんとするときは、一拍子に抜けて片手太刀となつて打つもまた同じ。左転右転は相雷刀、左右の変と同じ。これ疾く刀背を取つて横に推し撞くなり。

同後れ打、俯入、敵外より深く入り打つ。

意思 後れ打

これ敵の拍子を受けて疾く入るなり。雷刀、下段、入身を打つ勢、相雷刀、足を坐き打つ勢、意、相同じ。挙げる所、迎えなり。

十三 合し打

打太刀・使太刀とも相下段にて進む。境外にて共に雷刀に揚げる。

打太刀 先に真直ぐに打つ。

使太刀 合し打つ。

打太刀 推し來たる。

使太刀 その節をうけて打太刀の右に転じ、足を順に打つ。

打太刀 却いて使太刀の首を打つ。
使太刀 順に相架け流し、逆に打太刀の右手に勝つ。

意思

退却して下を打つ時、昔の遠近の位に云う、敵の動き大なることを見るなり。足の踏み出し・太刀の切り出し、何につきてもまたその調子に乗りて角すまに却かき打つべし。また敵の我が拳を取らんと欲するとき、下を打つ意もまた同じ。

また角にて闕かく拍子の意もまた少しあり。思ふべし。

十四 左転 刀背を執つて推す 逆

打太刀・使太刀とも下段にて進み、境外にて共に揚げる。

打太刀 強く堅たてに首を打つ。真直ぐに進み打つ。

使太刀 逆に左に転じ腕を切り、刀背を執りて推し撞く。

打太刀 また首を打つ。

使太刀 逆に相架け流し、打太刀の左手を順に打つ。

十五 右転 刀背を執つて推す 順

前に同じ

使太刀 順に右に転じ打太刀の腕に勝ち、刀背を執り撞く。

打太刀 退りさがて使太刀の首を打つ。

使太刀 順に相架け、逆に打太刀の右手を打つ。

意思

相雷刀、左右の変勢、同じ。これ刃背を執つて横に推すものなり。

四、撥草〔二勢法〕

十六 先合

打太刀 雷刀

使太刀 撥草はこそうにて進み、交刃境より疾雷刀の如く撥草より先打し、疾く打

太刀の右手に逆打する。

意思

これ雷刀の先後の勢と同じ。また先は打つて勝ち、打たれて合し勝つ位なり。後は、外して越して勝つものにして天狗抄花車なり。

十七 天の花車

使太刀 撥草（霞太刀なり）

打太刀 雷刀より青岸に下ろし、使太刀の肘を浅く打つ。

使太刀 引き下がりながら堅たてに十文字と打太刀の柄中に勝つ。

五、十太刀変〔二勢法〕

十八 首

打太刀 雷刀

使太刀 十太刀にて進む。

打太刀 使太刀の首を打つ。

使太刀 太刀を立て当たり、我が左に拂い落し、打太刀の左手を打ち、十

太刀に構える。

幾度も尽きざる位なり。

十九 捍ふせぎ入るを打つ

打太刀 雷刀

使太刀 十太刀にて進む。

打太刀 雷刀より下段に下ろし、拳を防ぎながら鋒ほつを下ろし、逆に相架け流さんと境内に入る。

使太刀 「入るところを」上より十文字と拳に勝つ。

意思

本伝は当たり返る拍子なりといえども、首を打つものは当たり拂うものなり。ゆえに附ける・当たるを兼ねる拍子なり。また受け入りを打つものは太刀一つを恃たのむにあらず。合気を離れる位なり。

子刀

敵 中段、拳を捍ふせいで来たる。

我 その表に触れて疾くその裏を打つ。

六、猿回変〔三勢法〕

二〇 先

打太刀 雷刀

使太刀 猿回にて進む。触刃境に入りて順に打太刀の左手に先打する。

或いは、

打太刀 架け止め、腹に来たる。

使太刀 順に相架け流し、逆に打太刀の右手に勝つ。

二一 後打勢

打太刀 雷刀より浅く使太刀の肩を打つ。

使太刀 却ひき外はずし真直ぐに乗り打つ。

意思

虎穴に入らずんば争かでか虎兎を得ん。酔後心を発す。我を忘れ、我を知る。また心は万境にて随つて転ず。病まいを去るべし。一の病、敵の鋒ほつを見る。二の病、敵の面を見る。三の病、臆おくするなり。この三つのものを去つて唯一心種字なり。手裏劍〔手の内〕を見ること肝要なり。

七、一刀変〔三勢法〕

二二 弾ねて後返り、また打落す

打太刀 雷刀より中段に変じ、浅く使太刀の肘を順に打つ。

使太刀 下より弾ね上げ元に復す。

打太刀 また順に肩を打つ。

使太刀 真直ぐに十字勝ち。

二三 是極せしごく

打太刀 雷刀より隻手かたて太刀となりて使太刀の腹を撥う。

使太刀 一刀両段と首を打つ。

意思

これ即ち一刀兩段の位。また上下の心の伸びる身。また「努めて英雄の心を知る、是極一刀という」は、この事なり。また我が筋を打つものなり。十文字を習う、また鋒に動きある時、調子に乗りて打つ意、同じ。

八、相雷刀〔三勢法〕

二四 刀捧に交す

打太刀・使太刀とも雷刀にて進む。

使太刀 交刃境にて隻手刀となり、順に打太刀の手あるいは眼を撥う。し

かして刀棒に交す、深く打太刀の手の下に入り、推し倒し、輪刀して打太刀の左手を打つ。

二五 折甲に交す

打太刀・使太刀とも雷刀にて進む。

使太刀 交刃境にて疾く折甲に交す、打太刀の雷刀の下に入り、推し進み右に交わり、順に打太刀の左手を打つ。

意思

これまた表裏の勝ちなり。時により用うべきことあり。疾く入るものなり。受け入りは昔の折甲勢なり。
二勢とも水月を越すものなり。

二六 俯し打つ

打太刀 雷刀より使太刀の手を撥って刀捧に交す、入り来たる。

使太刀 疾く我が右に転じ身を俯し、横に打太刀の左手を打つ。

意思

これ前勢を打つものなり。藻の下、近々の位、雷刀、下段、入身を打つ勢、相雷刀、足を坐き打つ勢、意、皆同じ。

九、雷刀〔五勢法〕

二七 撥草を打つ 順

打太刀 撥草

使太刀 雷刀。交刃境より打太刀の首を打つ。

打太刀 架け止め、付け打に使太刀の首を打つ。

使太刀 順に架け止め、打太刀の右手を逆に打つ。

或いは、

打太刀 架け止める。

使太刀 同時に逆に右手を打つ。

二八 撥草を打つ 逆

打太刀 撥草

使太刀 雷刀。交刃境より打太刀の首を打つ。

打太刀 順に架け止め、逆に使太刀の右手を打つ。

使太刀 逆に架け止め、打太刀の左の手を順に打つ。

意思

迎えなり。進み挑みて我が先の先と勝つべし。我が先を迎えという。ま

た棒心の語に云う、敵の不意、動き無き処、我れ敢て進み打つ、その意思、肝要なり。目著は観見なり。

二九 十太刀を打つ

打太刀 十太刀

使太刀 雷刀より中・下段の間に變じ、拳を防いで入る。

打太刀 使太刀の首を打ち來たる。

使太刀 順に相架け流し、逆に打太刀の右手に勝つ。

意思

枝葉書に云く、敵の間隙を尋ねるも悪し。我が間を塞ぐもまた悪しと。しかれども氣、合う時は打たず、少し避ける意を以て後、疾く没茲味の打ちを以て打つ。始め撞く心あり。これ兩一尺の迎えなり。また刀を以て拳を防ぎ、意を以て首を守るものなり。

三〇 車を打つ 逆止める

打太刀 車

使太刀 雷刀より打太刀の首を打つ。

使太刀 逆に架け止め、打太刀の左手を打つ。

三一 車を打つ 順流す

前に同じ

使太刀 打太刀の首を打つ。

打太刀 順に架け止め、使太刀の足を逆に打つ。

使太刀 順に架け流し、打太刀の右手に勝つ。

意思

これ雷刀、撥草打つ勢と同意なり。すべてかくの如きは敵の異勢に惑い、進むことあたわざるものを導くなり。異勢を畏れて惑えば、敵に使われ受太刀となり、遂に打たれる。

右三十一勢法、至近なりといえども、先哲の奥旨を含む。道は邇(近)ききあり、これを遠きに求むることなかれ。事は易ききあり、これを難きに求むることなかれ。天狗抄を伝えて後、許すものなり。

小太刀勢法

一、小転下段変

一下段変

打太刀 雷刀

使太刀 下段。拳を膝がしら近くに置き、鋒を左にし、身を低くして境に入る。

打太刀 首に打ち来たる。

使太刀 下より当たる拍子を以て架け止め、左手、打太刀の両拳の内へ入

れ、右手、打太刀の腹を撞く。変化は前の通り。

意思

この無刀の心、心広く体胖、左足のはたらき、打たれて勝つ。勢い強く敵を突倒す意、相懸けを恃むなかれ。目著は拳。すべて短刀は深く入ることを主とす。戸を越すの教え〔円明流〕第一なり。これ先の心なり。しかれども懸に待あり、水月を越すものなり。位に勝ちあり。近々の位、この左手を以て拳を払うもまた可なり。

心持に云く、

五合剣第一・勇は危懼なき心なり。ゆえに心広く体胖なり。目付は二星また拳。拍子は物打にて石火。身懸かりは大胯に左足は境に入る。水月の足なり。近々敵を拳倒す。また身を離れざるなり。膝膠の身〔円明流〕、水月を越し、戸を越すものなり。

二 後れ入る

打太刀 雷刀

使太刀 下段。構え前の如くにして進み、下を残して上を境内に入れる。

打太刀 浅く首を打つ。

使太刀 首を後に外す。

打太刀 刀を挙げる。

使太刀 その節に随つて首を捍ぎ、深く身を入れて左手を添えて、打太刀を拳倒して迫る。

意思

後れ入るものは遠々、連拍子、昔の風水の音。弾ね入るものは、胸を拳倒し拂い入る、同節なり。相架けはすべて近き善し。

三 鋒を弾ね入る

打太刀 雷刀

使太刀 下段にして上境に入る。

打太刀 浅く使太刀の首を打つ。

使太刀 後ろに外す。

打太刀 中段にして或いは撞く。

使太刀 鋒を撥つて入り、拳を捉えて撞き迫まる。

意思

この遠々の位、敵を引き出すなり。昔の風水の音、味わうべし。皆同上、胸を突き倒して打つ善し。拂うと入るとは同節。眼、峯にあり、手、刺を拂う意あり。

四腹を捍ふせぎ入る 順流す

打太刀 雷刀より使太刀の左腹を打つ。

使太刀 順に架け流し、打太刀の拳を捉えて打つ。

五腹を捍ふせぎ入る 逆架け止める

打太刀 使太刀の右腹を打つ。

使太刀 身に近く打ち止め、拳倒して迫る。

意思

この順は相懸け流し、逆は相懸け止めなり。先に入らんと欲する時は、敵、必ず腹を打つ。無刀、刀を取らんと欲するときは敵、必ず却かき打つ。これ人の定情なり。敵の拍子受けるものなり。即ち位を残すものなり。

六足を外はずす 順・逆同勢

打太刀 雷刀より足を払う。

使太刀 足を外して疾く越し入り打ち、近く迫る。

意思

心を神妙剣と水月とに用いて、すかし越して勝つ意なり。足を捍ふせぐは深く換え来たるものなり。相架けと打落しのみ。

七足を捍ふせぐ 架け流す

打太刀 雷刀

使太刀 下段

打太刀 深く足を切る。

使太刀 順に架け流し打つ。

逆に来たるものは刀を下げて架け止め打つ。

意思

前述の通り。

二、小転雷刀変

一 架け撥はい

打太刀 雷刀

使太刀 雷刀

打太刀 首に打ち来たる。

使太刀 順に架け打太刀〔の〕拳を左手を副たえて右に撥はい落し衝つき迫る。

意思

初学の士、もし死生分かれるの地に到れば、雷刀は、手、危うきに似たり。守ること全くして敵を呑む位を得て後、これを用うべし。また心は水中の月に似たり。形、鏡上の影の如し。また左足の働きも同じ。すべて鏡に掛けて進み、敵に応じて勝つべし。撃石火の機なり。これまた拳を拂つて打つも可なり。

二 手を捍ふせぐ 架け止める

打太刀 逆に使太刀の拳を打つ。

使太刀 架け止め、我が右に撥はい落し迫る。

三 吭のどを捍ふせぐ 架け流す

打太刀 順に使太刀の刃を打つ。
使太刀 逆に架け流し、打太刀の左手を打ち、左手にて打太刀の拳を払い突く。

これ浅きは却き打ち或いは越し勝つ。深きものは一尺五寸の外しなり。
遠々近々の位なり。

意思

雷刀は敵多く腹を打たず。これまた常情なり。これ二心持たざる意あり。
また待曲の意あり。

三、小転下段変雷刀

一 下段変雷刀 敵雷刀 下〔以下〕同じ

打太刀 雷刀にして待つ。

使太刀 下段にて進み、刃境に到り、刀を挙げて入らんとす。

打太刀 その処を外さず順に腹を打つ。

使太刀 同節その手を打つ。

四腹を外し打つ 敵順

打太刀 順に浅く使太刀の腹を打つ。

使太刀 少し却き真直ぐにその手を打つ。

五腹を外し打つ 敵逆

打太刀 至って浅く逆に使太刀の腹を打つ。

使太刀 却き外し疾く進み、打太刀の手を打ち迫る。

二逆打止める

逆は前の通りにして今度は、

打太刀 逆に腹を打つ。

使太刀 打止めて拳を払って迫る。

六転し打落し

打太刀 順に使太刀の肩に打ち来たる。

使太刀 その先を上より転し勝つ。

或いは、

打太刀 足に来たる。

使太刀 上より打ち下ろし止め、折りしくも可なり。

二逆勢〔二が二箇所ある〕

打太刀 雷刀

使太刀 下段より刀を挙げて入らんとする。

打太刀 使太刀の手を打ち来たる。

使太刀 逆に打ち止め、我が右に拂い落し迫る。

意思

これ皆本伝の勝ちなり。肋一寸の心を以て却き打あるいは外し越して勝つ。転身は順逆ともに一尺五寸の外しなり。肋一寸の義、下に出す。

三 雷刀 轉身

使太刀 打太刀ともに雷刀にて進む。

打太刀 順に使太刀の腹を打つ。

使太刀 打太刀の左に転じて打太刀の拳を打つ。

四 足を外す

打太刀 雷刀

使太刀 下段より中段に構え進み入らんとす。

打太刀 左手を放して順に足を切る。

使太刀 足を却いて外す。

打太刀 輪刀して逆に拳を打つ。

使太刀 架け止めて拳を払って迫る。

五 足を外す 逆

打太刀 逆に使太刀の足を切る。

使太刀 外して打太刀の首を打つ。

打太刀 却いて逆に架けて、順に使太刀の首を打つ。

使太刀 逆に相架け流し十文字と拳に勝つ。

六 止め流す 無数

打太刀 雷刀

使太刀 下段より雷刀に変じ入る。

打太刀 浅く逆に右手を打つ。

使太刀 逆に架け止める。

打太刀 却いて順に吭を打つ。

使太刀 架け流し進む。

打太刀 また逆に右手を打つ。

使太刀 架け止めて拳を捉えて撞く。

七 止々勢

打太刀 雷刀

使太刀 下段より中段に変じて入らんとす。

打太刀 拳に打ち来たる。

使太刀 上に外し首を打つ。

打太刀 逆に相架け、順に吭を打つ。

使太刀 架け流す。

打太刀 また却いて逆に手を打つ。

使太刀 架け止める。

打太刀 また却いて順に吭を打つ。

使太刀 十文字と拳を打ち止める。

打太刀 また逆に首に来たる。

使太刀 打止め拳を撥って撞く。

八 中段を打つ

打太刀 中段

使太刀 雷刀にて進みよる。刃境にて探り打にする。

打太刀 動かず。

使太刀 疾く裏より鋒を撥って入り迫る。

九 中段を打つ

打太刀 中段

使太刀 雷刀より中段に下ろし、表に架けて入らんとす。

打太刀 却かいて首を打つ。

使太刀 筋を變わりて上より打つ。

十 轉身 先打勢

打太刀 青岸

使太刀 横雷刀にて進み刃境にて打太刀の拳をもじり打にする。

打太刀 上に外しかた隻手刀となりて使太刀の肩を拂う。

使太刀 上より十文字と勝つ。

十一 車しやに向かう

打太刀 車に立ちて待つ。

使太刀 雷刀より下段になり、入らんとする。

打太刀 斜に使太刀の肩を打つ。

使太刀 架け流し拳を打つて迫る。

十二 弾ねるを外す

打太刀 車

使太刀 雷刀より下段に下ろす。

打太刀 使太刀の足を打つ。

使太刀 外す。

打太刀 また腹を弾ねる。

使太刀 上より打ち止め勝つ（打太刀の左によること）。



「順車」『截合口伝書』（柳生文書）に挿まれた絵
江戸時代の車の構えを知る貴重な絵である。

〔二刀勢法〕

一 両刀雷刀

使太刀 両刀

打太刀 雷刀にて来たる。

使太刀 左手、中刀を上段にして、鋒は打太刀の左眼を指し、刀を斜めにし

て身を防ぐ。大刀は撥章勢はつしょうに立ち、左脇を先にし斜めに向かつて進む。

打太刀 使太刀の首に打ち来たる。

使太刀 中刀を以て相架け止め、太刀を以て打太刀の左手を打つ。

子刀

(一) 打太刀 逆に深く使太刀の首を打つ。

使太刀 大刀を以て止め、中刀を以て撞く。

(二) 打太刀 中段

使太刀 鋒低きものは、中刀を以て鋒を抑え、大刀を以て首あ

るいは肩を打つ。一節なり。

(三) 打太刀 中段

使太刀 鋒高きものはすくい上げ、膝あるいは足を打つ。抑えれ

ば則ち、拳こぶしを打たれることあり。これを戒む。

(四) 打太刀 初め左拳を打つ。

使太刀 則ち一節〔打太刀が〕その手を打つと齊ひとしく左拳を外す。

これ転まわし勝なり。

意思

左手打たれて勝つ意、一調子なり。しかれども自ら押おき自ら避ける勢なり。連拍つれ子なり。また小太刀一尺五寸。外の教えに云う、左手を出しこ

れを切らしめて勝つ意もまた通ず。深く打つときは受けるなり。

二 同円曲

打太刀 雷刀

使太刀 円曲に構えて進む。

打太刀 その交上を浅く打つ。

使太刀 僅わずかかに左右に開き避け、元に復す。

打太刀 また少し深く打つ。

使太刀 両刀を下げて避ける。

打太刀 深く首を打つ。

使太刀 両刃を深く交えて深く入り相架け止め、右刀を反して打太刀の腕を打つ。

意思

両刀ともに中段にして左右の鋒を交えること四五寸（太刀の切先より四五寸の処に小刀の先を付ける）、太刀を上にして短刀を下にす。円明流にてこれを円曲という。これ身よく太刀の中に納まるものなり。五箇の身の如し。よくその道を塞ふさぐ構えなり。

これ武威流〔円明流〕裏の勢法第一勢なり。よく術を尽すものなり。

右旋左転、長短一味の三勢を兼ねる意なり。また敵を引き出す意もあり。

また引いて迎える意もあり。

三 同下段の円曲

使太刀 両刀を前に垂れ下段円曲となりて進む。

打太刀 浅く首を打つ。

使太刀 少し頭身を却けて避ける。

打太刀 刀を拳げて深く首を打つ。

使太刀 両刀を深く交えて相架け止める。

打太刀 また刀を拳げて打たんとする。

使太刀 左刀を以て打太刀の右手を打つ。

意思

無刀の意。昔の風水の意。引いて迎えるなり。遠々近々、五七條〔兵法三千五箇条〕戸を越す、膝膠しつこうの附け、漆膠しつこうの身、身長方なげくま、扉の身等、味わうべし。

我れ一刀、敵両刀〔対二刀勢法〕

一 火砲勢

弾ねるを主とするゆえなり。打ち下ろして下段より勝つゆえに下段と同意なり。

使太刀 雷刀にして進む。

打太刀 円曲にして来たる。

使太刀 浅く打太刀の円曲中央、交刃上を打つて刀を下段に下げる。

打太刀 刀を僅かに左右に開きこれを避け、また初めに復し、左刀、使太

刀の刀を抑えて右刀を以て撞き来たる。

使太刀 下より打太刀の大刀を弾ね上げ、逆に打太刀の右拳を打つ。

或いは順に流して逆に打太刀の右拳に勝つ。

しかし雷刀より下段に變ずるは敵を迎える意あり。また雷刀は我が関を

防ぐことを要す。敵、両刀の中段・下段は我が関を越さんことを計る。雷刀、初学越され易きものなり。ゆえにその実、下段となりて迎えるを善しとす。

交刃下を弾ねるものは右刀を弾ねるを主とす。また逆に打つ時は、敵、右刀を以て止め、左刀を以て拳を打つことある時は、拳を却き下げて止め、刀を反して順に打つ。或いは反さずして撞く。また敵、右刀を反して首に逆に打ち来たる時は、却いて逆に相架け流し、順に左手を打つ。すべて心、剛にして、打ち、強きを善しとす。迫れば則ち心を敵の左刀に著けるべし。また隻手太刀は弱くして遅し。しかれどもよく伸びる。両手太刀は強くして疾し。しかし少しく縮むゆえ、強きを好み疾く迅速にして強く打破し、迫つて撞くを善しとす。遠きにありて伺い待つこと悪し。

火砲勢意思 雷刀、両刀の円曲を破る

打ち下ろして下段より勝つゆえに下段と同意なり。

両刀に勝たんと欲せば、よく両刀の意を尽すこと肝要なり。初め深打なり。至つて浅き打なり。打つて後、虚実を見て弾ねる意なり。弾ね被せて勝つ、これもまた表裏の勝ちなり。乱してこれを取るものなり。

二 城郭偷眼勢

打太刀 中刀、中段にして身を防ぎ、太刀、撥草勢にして使太刀を羨うらやむ。

使太刀 城郭順勢に立ちて鋒を打太刀の左腕に指し、専ら右腕を見て左拳

を見ずして見るなり。拍子をとりに進む。文を切りながら進む。

打太刀 来たる。

使太刀 虚を見て浅く打太刀の左拳を打ち、疾く却いて元に復す。

打太刀 右刀を以て順に使太刀の拳を打つ。

使太刀 拳を却けて止め、刀を反して逆に打太刀の右手を打つ。

打太刀 却いてまた使太刀の左肩を順に打つ。

使太刀 疾く逆に相架け流し、打太刀の左脇（拳）を打つ。

打太刀 また順に足を払う。

使太刀 鋒を下げ順に相架け止め、逆に打太刀の右拳を打つ。

打太刀 また使太刀の脇を打つ。

使太刀 逆に相架け流し、順に打太刀の脇を打つ。

打太刀 逆に使太刀の右肩を打つ。

使太刀 疾く身を沈め、刀を弾ね上げて順に相架け流し、逆に打太刀の足を打つ。

を打つ。

打太刀 また順に左肩を打つ。

使太刀 疾く逆に相架け流し、大いに打太刀の左脇に寄り足を打ち、打太

刀の働きを見守る。

これ始め敵の左拳を打つものは順に横打なり。敵を迎えるなり。左刀を防ぐものなり。虚を見て屢々打つ。しかし浪打することを戒しむ。これを以て敵と争う。敵を牽きだすものなり。手を打たれざるを戒しむ。また敵、鋒を抑えて首を打てば、右より鋒を輪にして架け止め、また鋒を抑える時、輪刀してその拳を打つ。また、足を捍ぎ、足を打ち、身を沈め、疾く相架け逆に打つは初学の急務なり。また順逆の打ち、必ず身用刀中に容れるものなり。また始め我が鋒、少し敵の鋒下に入れるものなり。

変化

(一) 打太刀 足を順に打って迫る。

使太刀 架け止め却って足を打つ。

(二) 打太刀 初め両刀とも下段

使太刀 将に直に撞かんとす。

打太刀 使太刀の鋒をすくい上げて入る。

使太刀 同機一節、鋒を下に廻し右拳を弾ね上げ、左に転じて上

よりまた拳を打ち、乗りつく。

(三) 打太刀 円曲

使太刀 下より大刀を弾ね撥い撞かんとす。

打太刀 却りて右刀を以て順に深く使太刀の左肩を打ち、副刀を

以て右手を打つ。

使太刀 疾く我が左角に転じ打太刀の右刀を架け止め、左刀を外

し打太刀の右拳を打ち、疾く刀を反して左拳を打つ。

意思

眼と鋒と敵の右手に心を著けて、我が鋒を以て軽く敵の左拳を打って引き出すものなり。

左拳を打つは迎えなり。左拳は見ずして自ずから見えるもの。昔の二目遣いなり。右手を見ること第一なり。かくの如きは一刀と同じことなり。

三雷刀先打

打太刀 両刀雷刀

使太刀 雷刀にて相進む。

使太刀 左拳を打つ色を示す。

打太刀 左手を外して中を開く。

使太刀 打太刀の左刀下を逆に吭あるいは腕を先打にする。

これ、打太刀、大刀を以て止め、短刀を以て撞くものを戒むべし。

意思

よく虚を見て打つものなり。これ左の鋒下より深く右手を打つ。懸かり口、道の教えの歌に云く、

廣きとは先き手備えに取り合わず

敵のい留守の本陣へ行け

この意なり。位を放つて打つ、また武威流〔円明流〕拍子の間を知る。太刀の起りおこを知らしめずして早く空より中る。これ一拍子なり。絶弦の打なり。また西に声して東を攻める意、左を挑みて右を打つ、表裏の意、中にあり。

四増補・天第五勢

打太刀 両刀雷刀

使太刀 雷刀にして相近づく。

使太刀 右に転じて順に浅く打太刀の左拳を打ち、拳を却しりぞけて刀を下げ

下段となる。

打太刀 使太刀の拳を打つ。

使太刀 順に相架け止め、刀を反して左に転じ、逆に打太刀の右手を打つ。

打太刀 却しりぞいて首を打つ。

使太刀 逆に相架け流し、右に轉身し、順に打太刀の脇を打つ。

打太刀 順に足を切る。

使太刀 鋒を下ろして相架け止め、刀を反して右手を打つ。

打太刀 また足を順に切る。

使太刀 逆に相架け流し雷刀に上げ、斬釘の如く打太刀の右手に勝つ。左足

前にす。

打太刀 また逆に右肩を打つ。

使太刀 逆に相架け止め、打太刀の左脇を順に打つ。

打太刀 左肩を打つ。

使太刀 順に架け止め、逆に打太刀の右手に勝つ。

五同・天第四勢

打太刀 両刀雷刀

使太刀 雷刀にして相近づく。

使太刀 少し右に移り、力を鋒に用い、浅く左拳あるいは刀を終おり打にし

て刀を却しりぞき下げ、少し左脇を前にして斜に向かう。

打太刀 右刀を以て使太刀の左肩を順に打つ。

使太刀 逆に相架け流し、順に打太刀の手を打つ。

打太刀 使太刀の拳を打つ。

使太刀 拳を引き順に相架け止め、逆に打太刀の右手を打つ。

打太刀 順に拳を打つ。

使太刀 逆に相架け流し、打太刀の右手に斬釘ざんてい勝ち。

打太刀 また順に足を切る。

使太刀 逆に相架け流し、順に左脇を打つ。

打太刀 右肩を打つ。

使太刀 疾く身を沈めて刀を弾ね上げ、順に相架け流し、逆に打太刀の右

手を打つ。

打太刀 また順に使太刀の左肩を打つ。

使太刀 逆に相架け流し、順に打太刀の左脇を打つ。

宮本武蔵「円明流」

春風館には円明流として十一本の勢法（変化無数）が伝えられるが、『柳生の芸能』にはその内七本が記載されている。本書ではこの七本のみを掲載する。『柳生の芸能』と春風館の遣い方は完全に一致しないので、春風館の遣い方をそのまま提示（初公開）する。

それにより『柳生の芸能』の遣い方も容易に理解できる。なお円明流については近刊の『宮本武蔵「円明流」を学ぶ』（書籍、DVD版ともにスキージャーナル）で詳解したい。



日本古武道大会（浅草第二十七回） 平成21年4月18日

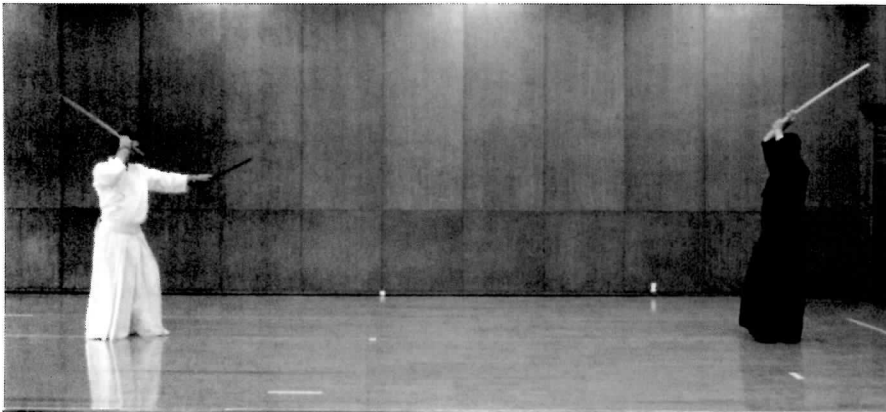
宮本武蔵「円明流」
演武 打太刀：赤羽根龍夫 使太刀：赤羽根大介

一本目
打太刀
使太刀

雷刃

左手中刀を上段にして、鋒は打太刀の左眼を指し、刀を斜めにして身を防ぐ。大刀は撥草勢に立ち、左脇を先にする。

双方、相懸かりに進む。



打太刀
使太刀

使太刀の頭に打ち来たる。中刀を以て相架け止め、太刀を以て打太刀の右内股を打つ。

打太刀 下村直樹 (右) 使太刀 赤羽根大介

二本目
打太刀・使太刀とも一本目の如く構え相懸かりに進む。



打太刀 逆に深く使太刀の右拳を打つ。
使太刀 大刀を以て止め中刀を以て撞く。





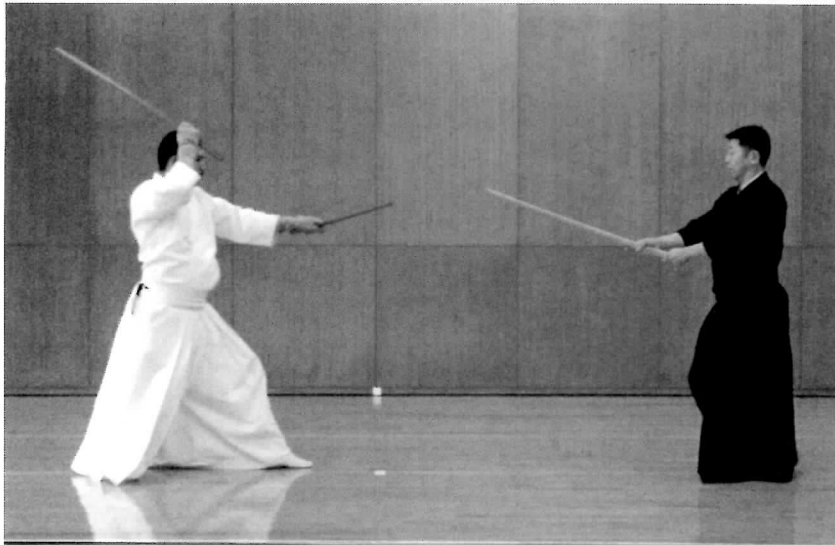
三本目
打太刀
使太刀

中段
一本目の如く構える。
相懸かりに進む。



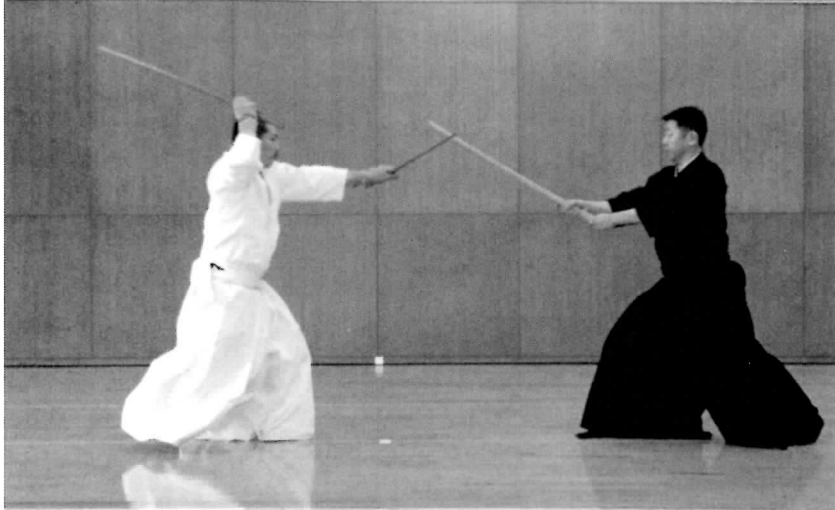
打太刀
使太刀

間境にて中段の鋒を僅かに下げて打ちを誘う。
打太刀の太刀が下がらんとする刹那、中
刀を以て鋒を左斜め下に抑え、同時に大
刀を持って左側頭あるいは肩を打つ。



四本目
打太刀
使太刀

中段
一本目の如く構える。
相懸かりに進む。



打太刀

間境にて中段の鋒を僅かに上げて
打たんとする。



使太刀

打たんとする「こ」の瞬間、打太刀の太
刀を左斜め上にすくい上げ、同時に内股
或いは足を打つ。

五本目
打太刀
使太刀

雷刀
一本目の如く構える。
相懸かりに進む。



打太刀
間境で左拳を打つ。
使太刀
その瞬間左拳を引き、太刀でもって頭を打つ。



六本目
打太刀
使太刀

雷刀
円曲の構え
相懸かりに進む。



打太刀
使太刀

円曲の交上を浅く打つ。
僅かに左右に開き避け、



使太刀
打太刀

西刃を深く交えて深く入り相架け止める。
太刀を上げんとする。



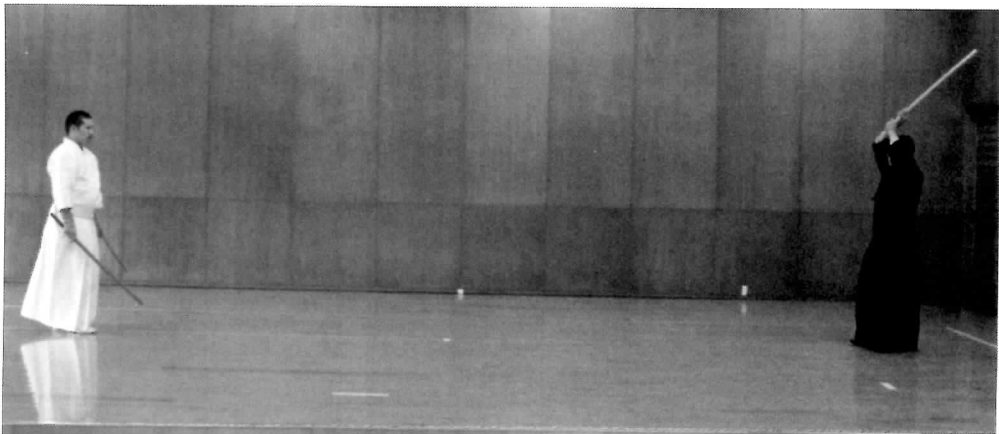


使太刀
打太刀
その瞬間、両刀を開く。
雷刀に振りかぶるや否や、

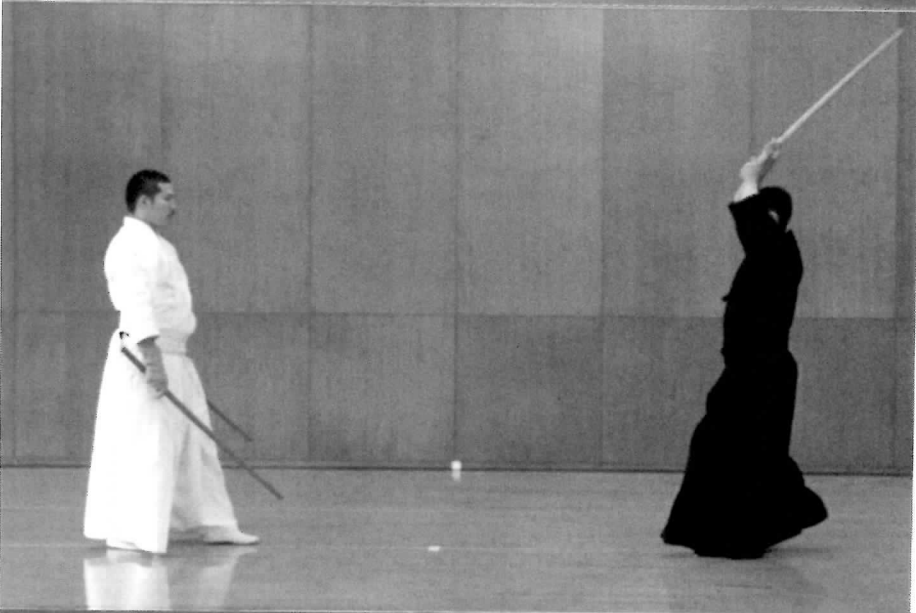


打太刀
使太刀
使太刀の頭を打っていく。
中刀でもって相架け止め、
太刀でもって膝あるいは足を打つ。

七本目
打太刀 雷刀
使太刀 両刀を前に垂れ下段田曲となる。



打太刀
相懸かりに進む。
深く頭を打つ。



使太刀 少し頭身を却けて、打太刀の打ちを外し、





使太刀 両刀を深く交えて入り相架け止める。



打太刀 太刀を上げんとする。
使太刀 その瞬間、両刀を開く。



打太刀 雷刀に振りかぶるや否や、使太刀の頭を打っていく。
使太刀 中刀でもって相架け止め、太刀でもって膝あるいは足を打つ。
或いは両刀を交えて入り、打太刀の両手首を押さえる。(実戦では眼を撞く)

付録 神戸金七と柳生厳長

春風館道場で神戸金七が伝えた柳生新陰流は幕末期の尾張柳生十代宗家・柳生厳周直伝の新陰流である。

明治時代という武道混乱期、多くの武道が近代ヨーロッパの身体操作の影響を受ける中で、神戸金七は江戸武士の新陰流をそのまま伝えようとする柳生厳周の教えに素直に従っただけでなく、並外れた才能を示したので、厳周に特に目をかけられ、江戸時代のままの柳生新陰流を少しも変えることなく教え込まれ、厳周・厳長親子が大正二年から昭和五年まで東京に出ている間、名古屋の道場を任せられ師範代を務めている。

また厳周に深く信頼され、門外不出の柳生文書のすべてを書き写すことを許されている。これらの文書は加藤伊三男館長によって秘藏され、今日に至るまで著者たちが刊行した文書以外はほとんど表に出されていない。

また神戸金七は厳周が生涯に渡って使いこんだ「指懸け」を、「これは厳周先生が一番大事にされたものだから大切にするように」といって加藤館長に譲り渡しており、現在は柳生文書と共に春風館の宝として秘藏されている。

厳周の高弟で「明治年間の印可受得者中最高の地位の人」（杉田定一）といわれた下條小三郎が、武田惣角や植芝盛平との交流の中で、「劍の時代は終わった」との認識の下、柳生新陰流を合気柔術の体捌き（まき）に合うように変えたのに倣い、近衛師団剣術師範となった厳長は近代戦に合うように新陰流を変えていったが、神戸金七は厳長のやり方には賛同せず、自分はいくまで厳周の太刀筋を変えなかった。

神戸は柳生新陰流だけでなく多くの古流剣術や槍術、剣道を学び、それぞれに才能を示したが、柳生厳周から柳生新陰流、佐藤政五郎から尾張貫流の相伝を受け後継者に指名された際に、それ以外の全ての武術を捨てて

いる。神戸の柳生新陰流や尾張貫流槍術には他流が混じっているのではないかとという批判もあるが、それは当たらない。それぞれの流儀の奥に達したものは、それぞれの特徴を熟知しており、いったん捨てる決意をすれば、ことごとくを捨てられるものである。特に神戸の場合は、この二つの流儀をそのまま後世に伝えようという硬い決意があり、その流儀の継承者に加藤伊三男を選んだ際には、加藤館長にも、それまでに学んだ全ての流儀を捨てるように命じている。

厳周の兄弟弟子としての厳長・神戸二人の新陰流に対する考え方は異なつたが、柳生新陰流を演武する際には、厳長はほとんどの場合、神戸金七を使太刀に選んでいる。

太刀筋を変えた厳長と、厳周の教えを守った神戸が揃って演武出来たことについては、私見によれば次のように考えられる。

打太刀・使太刀で演武する組太刀の場合、打太刀は新陰流に打ち懸かってくる他流の役を受け持ち、使太刀がそれに対して新陰流の太刀筋を使つて勝つ役割である。教習の段階では、新陰流の熟練者である打太刀が使太刀に間合いや太刀筋を教える先生の役を受け持つ。熟練者同士の場合でも上位者が打太刀を演ずる場合が多いが、実際は新陰流の太刀筋を使う使太刀が重要である。厳長と神戸が組太刀を遣う場合、厳長はほとんどの場合、他流で打ちかかる打太刀の役を受け持ったので、厳長が新陰流の太刀筋を変えたとしても、神戸は厳周から受け継いだ新陰流の技を遣えばよかつたのである。

現在残された資料によると二人の演武の記録は次の通りである。

昭和六年二月十四日、名古屋で開催された第三師団剣術競技大会のパンフレットには次のようである。神戸金七の旧姓は服部である。（神戸金七三七歳、柳生厳長三九歳）

○帝国剣道型

打太刀 服部徳次郎

使太刀 加藤七左衛門

○柳生流兵法剣道使順

一、九箇之太刀 (解題、使演)

打太刀 服部 (神戸) 金七

使太刀 大橋喜左衛門

二、勢法試合 (解題、使演)

打太刀師範 柳生巖長

使太刀 服部 (神戸) 金七

三、居合截合

打太刀 柳生巖長

使太刀 鹿嶋清孝

居合並びに馬上剣

柳生巖長

四、燕飛 (解題、使演)

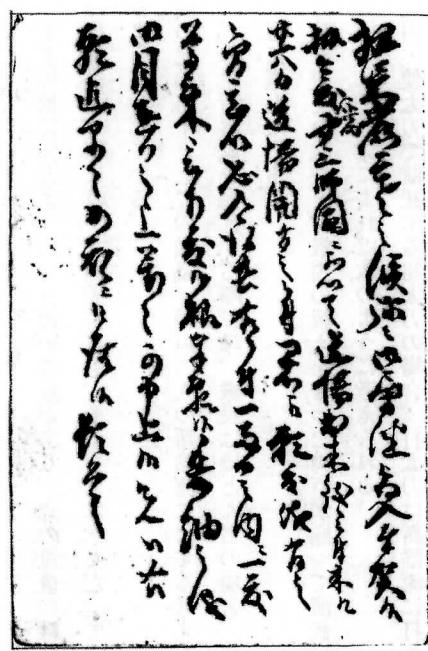
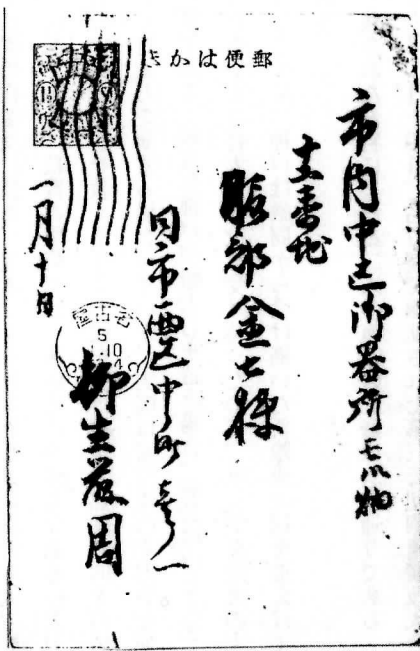
打太刀 柳生巖長

使太刀 中沢保三

この大会に柳生流弟子代表として出場してほしいと、柳生巖周から神戸に依頼する手紙が春風館に遺されている。(下段)

巖周はこの大会の一年後の昭和七年二月十一日八十八歳で没している。

同年三月二十七日の「柳生流兵法道場 金剛館」で行なわれた巖周追悼



演武会の「追善武道大会番組」のパンフレットは次のようになっている。

一、三学円之太刀

(一) 打太刀 柳生巖長

使太刀 大津正吉

(二) 打太刀 柳生延春

使太刀 柳生武子

(三) 打太刀 柳生巖長

使太刀 斉藤直芳

(四) 打太刀 大橋喜左衛門

使太刀 伊東宣昭

二、九箇之太刀

(一) 打太刀 柳生巖長

使太刀 服部金七

三、試合勢法

(一) 雷刀及中段

一、打太刀 服部金七

使太刀 少年組 柳生延春他

二、打太刀 柳生巖長

使太刀 鹿島清孝

三、打太刀 柳生巖長

使太刀 服部金七

(二) 小太刀

打太刀 服部金七

使太刀 鹿嶋清孝

(三) 二刀

四、居合

打太刀 近藤幸三
使太刀 萩尾孝之

(一) 吉田重成

(二) 大津文子

(三) 中西春一

(四) 萩尾孝之

(五) 近藤幸三

(六) 鹿島清孝

(七) 柳生巖長

五、杖術

打太刀 柳生巖長

使太刀 柳生延春

六、居合截合

(一) 打太刀 鹿島清孝

使太刀 萩尾孝之

(二) 打太刀 柳生巖長

使太刀 近藤幸三

(三) 打太刀 柳生巖長

使太刀 鹿島清孝

七、天狗抄

打太刀 柳生巖長

使太刀 服部金七

八、燕飛

打太刀 柳生巖長

使太刀 中沢保三

九、稽古試合

服部金七

柳生延春（小学生）

他六名

敵周の追悼大会で柳生敵長と神戸金七が九箇の太刀・試合勢法・天狗抄と三度も一緒に演武していることの意味は大きい。宗家として敵長が、敵周の門人代表として神戸が、柳生新陰流を盛り立てていくということを外に知らしめたということである。

なお延春氏と「三学円の太刀」を演武している柳生武子は敵長の娘で、敵周の教えをよく守り、敵周が力を入れて教えて新陰流に長じていたが、若くして夭逝したとのことである。

昭和七年五月には柳生新陰流を澄宮の台覧に供している。

台覧 柳生流兵法剣道任演使順

丸太刀の部

第一 三学円の太刀 五箇の太刀

(一) 大転の使方 一名取拳ヶ使方

打太刀 師範 柳生敵長

使太刀 齊藤直芳

(二) 小転の使方

打太刀 林健太郎

使太刀 柳生敵長

第二 九箇の太刀

打太刀 柳生敵長

使太刀 林健太郎

第三 勢法試合 上下中八勢法

打太刀 柳生敵長

使太刀 服部金七

第四 小太刀 五勢法

打太刀 服部金七

使太刀 柳生敵長

第五 二刀 三勢法

打太刀 鹿島清孝

使太刀 萩尾孝之

第六 天狗抄 七箇の太刀

打太刀 柳生敵長

使太刀 服部金七

第七 燕飛 六箇の太刀（続け使）

打太刀 柳生敵長

使太刀 中沢保三

居合の部

第一 居合立合 三箇の太刀

萩尾孝之

第二 居合立合 三箇の太刀

鹿島 清孝

第三 居合截合

(一) 打太刀 鹿島 清孝

使太刀 萩尾 孝之
 (二) 打太刀 柳生 巖長
 使太刀 鹿島 清孝
 稽古試合の部

服部 金七
 落合 信夫
 柳澤 恒幸
 林 一也
 齊藤 直芳
 林 彰彦
 川村左武郎
 林 一也
 服部 金七



昭和八年の名古屋放送ラジオ番組収録には柳生巖長、神戸金七、鹿嶋清孝、中沢保三が出演している。(写真 左巖長、右神戸)

(参考) 昭和十年四月一日の日本古武道振興会主催の「流祖祭」は下條小三郎門下が演武している。

柳生流 下條小三郎
 浅野正恭
 柳生流 大坪元治
 小南英一郎

昭和十五年五月二七日の奈良県および日本古武道振興会主催の「全国古武道各流型大会」は次の通りである。この時、巖長は柳生流として抜刀及び居合を演武している。

柳生流 (抜刀、居合、立合術)
 柳生巖長
 新陰流 (丸太刀、三学・九箇・燕飛・天狗抄の型)
 打太刀 柳生巖長
 使太刀 石黒大介
 柳生流 試合勢法
 打太刀 柳生巖長
 使太刀 神戸金七

昭和十五年九月三十日の東京市および日本古武道振興会主催の「全国古武道各流型大会」は次の通りである。

貫流 (槍術の型)
 打太刀 神戸金七
 使太刀 佐藤政五郎
 柳生流 (試合勢法)

打太刀 柳生巖長

使太刀 神戸金七

新陰流 (丸太刀)

打太刀 柳生巖長

使太刀 神戸金七

昭和十六年の宮内省、済寧館道場での「武道大会剣道試合」での演武は次の通りである。(神戸四十七歳、巖長四十九歳)

大日本帝国剣道形

範士(打) 齋村五郎

範士(仕) 持田盛二

夢想神傳流意合

範士 橋本統陽

試斬

範士 中山博道

小野派一刀流の形

教士(打) 笹森順造

教士(仕) 鶴海成和

柳生流兵法丸太刀

一、三学円の太刀、九箇の太刀、天狗抄の中

打太刀 柳生巖長

使太刀 神戸金七

二、燕飛

打太刀 柳生巖長

使太刀 成田雄三

齋村五郎や持田盛二といった剣道界の大御所、昭和の剣聖といわれた中山博道の名が見えて興味深い。当時は剣道界が活況を呈しており、巖長は剣道の高段者を新陰流の門弟とすることに積極的だったが、神戸金七は、それでは新陰流が変質してしまうと危惧していたそうである。

昭和十七年六月下旬、五日間にわたり、京都帝国大学道場に於て、京都帝国大学・立命館大学・同志社大学各剣道部共同主催にて、「柳生流兵法・刀法・抜刀術・試斬講習会」が開催された。講師、助講は次の通りである。

講師

新陰流兵法正統第二十世

柳生流兵法正統第十三代師範 柳生巖長先生

立命館大学剣道師範

助講

柳生流兵法目録 神戸金七先生

柳生流兵法・抜刀目録 鹿嶋清孝先生

柳生流兵法・抜刀目録 萩尾孝之先生

柳生流兵法・試斬目録 栗本信三先生

パンフレットによると演武は次の通りである。

一、太刀始

刀法・抜刀 講師 柳生師範

試斬 助講 栗本先生

一、打太刀・使太刀にて演ずる抜刀・居合立合の截合太刀

打太刀 講師 柳生師範

使太刀 助講 鹿島先生

一、使太刀一人にて行ずる抜刀居合立合の截合の太刀

使刀 鹿島先生

使刀 柳生師範

一、新陰流兵法丸太刀示範

柳生流兵法勢法

打太刀 講師 柳生師範

使太刀 助講 神戸先生

一、兵法古道純正刀法的一般示範

(諸種の太刀の構及自然自由使刀の範例)

使刀 柳生師範

この場合もやはり本来の勢法は新陰流として、厳長と神戸二人だけで演武している。江戸後期に作られた試合勢法は柳生流となつてゐる。

昭和二十九年の第二回全日本剣道選手権大会では二人だけで新陰流を演武している。剣道以外に当日行なわれた試合並びに演武は次の通りである。(神戸六〇歳、厳長六十二歳)

一、特別試合 錬士 多賀葵子 剣道教士 武田政富

錬士 高野初江 薙刀教士 島田晃子

一、柳生制剛流抜刀 柳生制剛流第十二世 柳生厳長

一、天道流薙刀之形

打 範士 美田村千代
仕 教士 西垣きん

一、新陰流兵法正統

新陰流正統第二十世 打太刀 皆伝 柳生厳長
使太刀 皆伝 神戸金七

太刀筋において宗家である自分に従わない神戸に対し、性格の激しい厳長は、東京の門人には激情にかられて神戸批判も口走ったこともあったようであるが、生涯にわたつて神戸金七を頼りとしていたことは、春風館道場に遺されている晩年に至るまでの神戸宛の手紙が物語っている。

また厳長亡き後、厳長の妻は若くして宗家になった延春氏の新陰流教育を私信で神戸に依頼しているが、宗家が人に教わるべきでないという門人達の反対により実現には至らなかつた。

厳長は昭和四十二年没。次の年の昭和四十三年正月、柳生新陰流研究の草分けであり第一人者である杉田定一より、神戸金七宛年賀状に次のようにある。

賀正

昭和四十二年正月

杉田定一

厳長先生の御長逝、何とも残念、この上、二、三十年に貴殿こそ御至流の第一人者です、切に御自愛を祈ります

厳長先生の御長逝、何とも残念。この上はただ貴殿こそ柳生流の第一人者です。切に御自愛を祈り上げます。

神戸金七は昭和五十五年四月没、八十七歳。神戸の墓は昭和五十七年、京都妙心寺の麟祥院の尾張柳生初代柳生兵庫助の墓の近くに加藤館長によって建てられ、春風館門人によって毎年、供養が続けられている。

なお、『柳生新陰流を学ぶ』で著者(赤羽根龍夫)が、「厳周も神戸先生も居合はやりませんでした」ということに関して熱心な読者から若干の問い合わせがあったので、ここで簡単に言及しておきたい。

柳生新陰流の宗家は江戸時代を通じて居合をすることはなかった。新陰流や一刀流など太刀勢法を身につけた剣術家は、刀を抜き付けた後は、その太刀勢法を使えばよいのであって、居合は余計なものである。ただ尾張柳生六代・柳生厳春(一七四一〜一八〇八)の時から尾張柳生家の兵法補佐役を務めた長岡家は、もともと柔術・居合抜刀術・小具足・組討などを中心とした総合武術である制剛流の継承家であり、尾張藩に制剛流居合が広まったことは事実である。

春風館には神戸金七が写した「制剛流居合 古目録・全」が残されており、その中に「伝来」として制剛流の系譜が次のように書かれている。

水早長左衛門信正——梶原源左衛門直景——梶原半之丞景明——大橋源右衛門尉政章——大橋喜之助政長——長岡重郎右衛門房虞——長岡五左衛門房英——長岡惣三郎房成

江戸時代の初期 長岡重郎右衛門房虞が柳生利厳に師事して高弟となるに及んで長岡家と柳生家との関係が密になり、次の房英が柳生厳春の兵法補佐役となっている。

しかしこの系譜は房成で終わっている。房成は柳生新陰流の勢法を集大成し、二百本に及ぶ「試合勢法」を考案したが、「刀法録」の中に「抜刀編」

はあるが、居合についての記述はない。詳しい調査は済んでいないが、柳生新陰流の中興に生涯を捧げた房成は制剛流の居合は伝えなかったと思われる。

一方、厳長は尾張柳生家の当主を約束された身でありながら、この制剛流の古目録をもとに独自の工夫を加えて居合を始めた。厳周は柳生家の人間がそんなことをすると後に問題を起こすとしたしなめ、また刀は人前で抜くものではないといつて道場以外で演武することに反対した。しかし厳長は聞き入れず、厳周の目の届かない場所で居合を工夫し広めていった。

昭和七年二月の厳周の死後、厳長は名古屋でも積極的に居合を教え始め、「柳生制剛流抜刀」または「柳生流居合」と称した。その居合の「伝来」は昭和十一年三月の厳長の下書によると、長岡房成の後は次のようになっている。

長岡房成——長岡権太郎房懼——長岡兵十郎房恭——柳生三五郎嚴周——柳生金治 平嚴長

しかし房成の後は厳長の創作であって、厳周は柳生家の当主として当然のことながら居合はやっていない。厳周の教えを護り神戸金七も居合はやらなかったが、後々問題が生じた時のために、これらの文書を残している。

厳長は自らの創作した制剛流居合の目録を鹿島清孝や萩尾孝之に与える際に「柳生流兵法抜刀目録」「新陰流兵法抜刀目録」として授与している。しかし厳長の目録の内容は新陰流の抜刀ではなく制剛流居合である。その後、鹿島清孝と仲違いした後、厳長は自らの工夫した居合を柳生制剛流と称するようになった。

鹿島の高弟鈴木安近は『新陰流居合』で、尾張柳生十二代・柳生延春が「鹿嶋さんが勝手に『新陰流居合』と名乗った、父厳長も生前『困ったことだ』と苦笑していた」（『剣道日本』平成八年六月号）という発言に異を唱え、厳長は「昭和二十年頃までは『柳生流居合』『新陰流剣術抜刀』『柳生流兵法抜刀』とか称しておられたようであり、昭和三十年代後半には柳生先生は『柳生制剛流抜刀術』と言って指導しておられ、鹿島清孝先生は『新陰流居合』と称して居られたようである」として、鈴木は鹿島から学んだ居合を「鹿島清孝先生伝『新陰流居合』」と称している。

鹿島から広まっている居合は鈴木のように「鹿島伝新陰流居合」と称するべきであり、また厳長からの伝を直接受け継ぐ居合は「厳長伝柳生制剛流居合」と称するべきものである。しかし共に柳生厳周までの尾張柳生家とはかかわりのないものであるから、厳密には「厳長伝制剛流居合」と称するべきものである。

なお鈴木安近は平成十八年に没しているが、晩年、病床の中で春風館の加藤館長に、自分は神戸先生に厳周先生の『新陰流抜刀勢法』を教えてくださいと頼んだが、あなたは制剛流居合をやっているのだから教えなさいと云われた。病気がよくなったら、あなたが新陰流抜刀勢法を教えてくださいと頼んだとのことである。

新陰流抜刀勢法は、このままでは厳周先生が遺した新陰流の抜刀がなくならないということで、神戸が春風館道場に來て始めて教え始めたものである。それ以外には新陰流抜刀勢法は残されていない。春風館道場では稽古のある日は七時三十分から一時間、ひたすら上・中・下、三本の抜き付けと、真剣を遣っての太刀勢法の稽古を続けている。

上記した演武パンフレットを見ると「新陰流」「柳生流」と、言い方がまちまちであるが、尾張柳生では上泉信綱を初代とした場合を「新陰流」、

柳生宗厳を初代とした場合を「柳生流」と呼んでいる。

宗厳の孫の柳生利厳は「金剛館沿革」によると「新陰流兵法正統第三世」「柳生流正系第二代」となる。厳長は自らを「新陰流正統第二十世」「柳生流兵法正統第十三代」「柳生制剛流第十二世」と称している。

パンフレットを見るかぎり、厳長自身は、伝統的な勢法を演武する場合は「新陰流」、試合勢法や居合を演武する場合は「柳生流」と云いたかったようであるが、必ずしも統一されていない。名古屋にあった尾張柳生の道場である「金剛館」の名称は「柳生流兵法道場」であり、昭和七年の嚴周追善武道大会では厳長は「柳生流師範」として挨拶している。

私たちの研究によれば、上泉信綱は正統的な新陰流は正田豊五郎に伝え、その後、柳生石舟斎宗厳と新たな新陰流を工夫し、さらにその後、柳生宗厳は上泉信綱と別れて徳川家康に出会うまでの二十七年間に新たな工夫を加えていったことは明らかである。（赤羽根大介・赤羽根龍夫校訂『上泉信綱伝 新陰流軍学「訓閲集」』〔スキージャーナル社〕の「解説」参照）正田伝と柳生伝の両方を伝えた熊本の細川藩は正田伝を「新陰流」と呼び、柳生宗厳が伝えた新陰流は「柳生流」と呼んでいる。

家康は「小野流（二刀流）は剣術なれど柳生流は兵法なり」と言い、また尾張柳生二代の利方は『討太刀目録』の「当新陰流兵法由来」で「宗厳は〔上泉信綱と別れた後〕昼夜・日暮、稽古工夫、間断なく、ついに無刀の道を開眼し、京、大阪、伏見へ出て数多の弟子を取り立て、それ以来、天下に柳生流と謂いならわすとかや」と書いている。

以上の事実を踏まえるならば、二つの名称をあわせて「柳生新陰流」と称することが伝統を重んじた正しい名称であると思われる。ただ江戸時代においても「柳生流」とも「新陰流」とも呼ばれていたことは事実であるので、どう呼んでも問題はない。

さて厳長は自分でも「はげしい感傷に堪えられない性癖の私」(『正伝新陰流』一七四頁)といっているように、感情的に激しやすく個性が強い人物であった。大坪指方の「厳長先生は工夫しすぎて新陰流を変えてしまった」という証言にもあるように、厳長は父から受け継いだ伝統の勢法にあきたらず、下条に倣^{なま}って独自の工夫を加えていった。父厳周はそれを認めず、特に天狗抄の「花車」の片足による勢法は「金治の奴踊りは真似をするな」と門弟を戒めていた。私見によれば、厳長の技が江戸武士の技と大きく異なってしまったのは、近衛師団の剣道師範ともなった厳長が、近代戦の軍刀の操作に合わないとの考えで、膝のバネを使い、腰を垂直に沈める新陰流の刀法を否定してしまったことによると思われる。

さらに厳長は江戸時代を通じて江戸柳生に頭を押さえられていたという思いから、尾張柳生こそが新陰流の本流であるということを強調するため「江戸が本家、尾張が分家」という柳生家本来の教えに背き、「正統尾州柳生、別派江戸柳生」「宗矩は親父の本伝を宗矩流に解釈・祖述して、・・・三代宗冬の不肖の道業をもって、古伝の正伝は亡佚・誤伝の著しいものを、後世に遺すにいたった」と江戸柳生を必要以上に貶^{おとし}め、柳生新陰流の歴史を歪^{よこ}めてしまった。

本来、江戸柳生と尾張柳生は「三学円の太刀」の「一刀両段」以外は技の上ではそれほど違いはなく、尾張柳生では江戸柳生の技も伝え、またその研究も怠っていない。寛政期の一時期、江戸の木挽町の江戸柳生道場に、長岡家の出身である柳生厳光、柳生義賢が尾張より応援にかけつけたこともあったようである。江戸柳生と尾張柳生の技に大きな違いがあればこのような交流は起り得ないことである。

江戸柳生と尾張柳生の違いについては、厳周から江戸柳生の勢法も学んでいた神戸により『月の抄と尾張柳生』として刊行されている。同書は江

戸柳生二代・柳生十兵衛の主著『月の抄』を尾張柳生の立場で解説したもので、江戸柳生と尾張柳生の違いが詳説されていて興味深い。現在のところは僅かな発行部数の私家版(発行者 加藤伊三男)であるが、折をみて公刊する予定である。

また「刀法録」には宮本武蔵の円明流についての記載が各所に見られる。尾張柳生は円明流の稽古もしていたことは、杉田定一の「名古屋柳生流では二刀流もとり入れていた」(『いろは柳生物語』)という証言でも明らかである。春風館道場では神戸金七より伝えられた円明流を現在でも稽古している。それは貫流槍術家から神戸が相伝を受けた円明流であるが、『刀法録』に載せられた柳生道場の円明流と同じものと思われる。

また柳生新陰流には槍もあり、江戸時代から尾張貫流槍術の道場も柳生道場の近くにあり、槍剣一体という発想のもと、厳周も槍の稽古を怠らなかつた。しかし他に教えを請うことを好まなかつた厳長は槍の稽古をしなかつた。

厳長は父厳周と共に明治以降の柳生新陰流興隆のもとを作り、また『正傳新陰流』は厳長の大言壮語癖による創作部分を除けば名著というべきものである。しかし上述したように、柳生新陰流の技を変え、柳生新陰流の宗家としてやるべきでない居合を創作し、不用意な発言により世間に多くの誤解を与えてしまったことを考えれば、厳長の功罪は半ばするというべきであろう。

神戸金七は『柳生の芸能』に、「他流の是非を論じることなく」と書いている。加藤館長も同じ考えである。しかしここで本書が厳長伝について云々するのは以下の理由による。

明治二十年以降、ヨーロッパ近代の兵式体育が小学校教育を通じて日本全国に広まった結果、日本人の身体文化の多くが失われ、日本人の足腰

の力が弱くなってしまった。日本人再生のためには、伝統的日本文化の見直しがぜひとも必要である。

日本人の伝統文化は江戸時代に形文化として自覚化された。特に武士の表芸であった剣術、それも將軍家の御家流である柳生新陰流の中に伝統的日本人の身体文化が由緒正しく体現されている。それを今日、正しく伝えるのは、明治という日本人の身体操作の改革期（古流武術の多くもその波に飲み込まれていった）にあつて、かたくなに江戸時代最後の尾張柳生宗家・巖周の教えを護り続けた神戸金七の柳生新陰流を置いて他にない。神戸金七が加藤館長に伝えた巖周伝新陰流を正しく学び、後世に伝えることが著者たちの最大の願いである。

日本の伝統文化を踏まえた新しい身体文化の創造が現代日本に求められている。



摩利支尊天画像（香風館蔵）

第32回 日本古武道演武大会

主催 日本古武道協会 平成21年2月8日 日本武道館



尾張貫流槍術 (柳生新陰流) 演武者

立合い	加藤伊三男(館長)、加藤宏
尾張貫流槍術一人遣い	神戸信夫 横地隆二
五行の形	田村聖悦 門脇泰憲
新陰流槍術	伊東敏琅 掘口精一
新陰流「三学円の太刀」	
江戸遣い	赤羽根龍夫 赤羽根大介
古伝大太刀	毛利圭介 藤原正道
尾張遣い	栗原敏明 川井武治
尾張貫流槍術自由試合	下村直樹 神戸溪太(十文字槍)
	横地浩紀 森 治紀
尾張貫流槍術模範試合	下村幸裕 下村直樹
介添え	小池祐紀 若尾洋子

第32回 日本古武道演武大会

主催 日本古武道協会 平成21年2月8日 日本武道館



柳生新陰流「三学円の太刀」 打太刀 赤羽根龍夫（右） 使太刀 赤羽根大介



尾張貫流槍術模範試合

下村幸裕（右） 下村直樹

写真「剣道日本」2009年4月号

日本古武道大会 (浅草第27回)

日本古武道振興会主催 平成21年4月18日



柳生新陰流 春風館道場関東支部

館長 加藤伊三男 (名古屋春風館道場)

関東支部長 赤羽根龍夫

関東支部師範 赤羽根大介

演武者 打太刀

使太刀

八勢法	ダン・コージ	米村 佳代
	佐藤 幸輝	佐藤 正幸
	井上 大吾	井上 陽華
	影山 正彦	影山 沙耶
三学円の太刀	赤羽根龍夫	赤羽根大介
中段	小池 祐紀	井上 大威
	ダン・コージ	若尾 洋子
燕 飛	井上 大吾	井上 大威
	ダン・コージ	小池 祐紀
七太刀	赤羽根大介	若尾 洋子
円明流	赤羽根龍夫	赤羽根大介

古武道の発展のためには子供たちを大事にしなければいけないという加藤館長の考えにより、今回から子供たち(小学2年生から中学1年生)を演武者に加えることにした。日本人の身体操作を確かなものとするために、伝統武道を学ぶ子供たちを育てていきたい。